

809
0-47

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30^{6m} 1 2 3 4 5

始



350-266
809
0.47

話術の研究

目次

一、緒言.....	一
二、話術と教授との関係.....	五
話術の基礎と教授の原則.....	六
話の上手下手と教授の巧拙.....	八
著者幼時の経験.....	九
他人の教授振を觀ての感想.....	一一
父兄母姉會.....	一二
三、話術の研究法.....	一三
話術研究の三要件.....	一三
成るべく多く他人の話を聴く事.....	一四
話の主眼點.....	一五
話の修飾.....	一七
成るべく多く書物を讀む事.....	二〇

4.9

新聞講談の研究……………二二二
 成るべく多く話して見る事……………三〇〇
 辯士の三時代……………三一
 初心の時代……………三一
 生慣れの時代……………三三
 成熟の時代……………三四
 話術の補助學科……………三六
 四、話術と群衆心理……………三八
 個人の心理と群衆の心理との違ひ……………三八
 交番の焼打……………三九
 露探の一語……………四〇
 群衆と理窟……………四一
 秘密の話……………四二
 人の口には戸が閉てられぬ……………四三
 群衆を奮起させる話……………四五
 私學校黨と大久保利通……………四六

大袈裟な言ひ方……………四八
 俳諧師一茶と前田侯……………五〇
 欠伸の傳染……………五五
 話者の愛嬌……………五六
 五、話材の撰擇……………五七
 話材撰擇の四要件……………五八
 語るべき對手に適當した材料を撰擇すること……………五八
 孔子の教へ方……………五九
 僧行基……………六〇
 隨器誘導……………六一
 話術の眞髓……………六三
 聽者の心に覺えのある事を話せ……………六四
 小學校の教授法……………六六
 一休禪師將軍の度膽を抜く……………六八
 一休禪師と蓮如上人との和歌問答……………七一
 輕口問答……………七二

話者自ら真に感じたる材料を撰擇すること……………七七

話材について十分豊富な智識を有すべきこと……………七九

話者の人格……………八一

至誠人を動かす……………八二

口で話さず心で話す……………八三

中江藤樹の書置……………八四

著者類焼の経験……………八七

罪を天下に謝す(山室氏)……………九〇

語るべき時に適當した材料を撰擇すること……………九八

某博士の失策……………九八

明治卅七八年戰役當時の實例……………一〇〇

四季折々に應じた材料を選ぶこと……………一〇二

時折の流行……………一〇三

烈女たか……………一〇五

櫻田門外血染の雪(例話)……………一〇六

語るべき場所に適當した材料を撰擇すること……………一一一

地方の事情に應ずること……………一二二

地方遊説の秘訣……………一二三

地方の宗教……………一二五

八代將軍吉宗公と大岡越前守……………一六

話題の撰び方……………一八

話の材料は無限無盡である……………二〇

六、話材の排列……………二二

教授の原則と話材の排列……………二三

豫備……………二四

提示……………二七

連結……………三三

總括……………三四

柳生十兵衛三巖の話(例話)……………三七

七、注意の律動……………四三

聽衆が倦きずに聽いて呉れる時間……………四四

疲勞の研究……………四六

始の刺激(拍手).....一四七
 終の刺激(中入り).....一五〇
 法心和尚の話.....一五四
 物外和尚が近藤勇を懲す.....一五八
 夫を成功させた妻(お定).....一六二
 八、話術と言葉.....一六五
 らしく話す.....一六七
 講話講演を主とする者.....一六八
 藝術家.....一六八
 解り易い言葉.....一七一
 廣告の心理.....一七四
 流行語.....一七六
 田舎者の言葉.....一七七
 九、模聲及び模形.....一七九
 色々な笑ひ方.....一八〇
 禽獸の鳴き聲.....一八三

色々な模聲.....一八五
 假聲.....一八九
 模形.....一九一
 自然の表情.....一九四
 五種の顔面表情.....一九六
 身振り手振り.....一九九
 啞問答.....二〇一
 米國大學の啞問答.....二〇五
 一〇、話術と言聲.....二〇七
 音聲は人格を代表す.....二〇八
 音度の加減.....二一二
 音聲を樂に出す法.....二一三
 五十音特有の性質.....二一四
 一一、話術と譬喩.....二一六
 話上手と譬喩.....二一七
 譬へかたのいろく.....二一八

話 術 の 研 究

緒 言

岡 柳 惟 一 著

私が此所で話術と申しますのは、つまり話し方の事であり、多勢の人の前に起つて如何したら上手に話が出来るか、言ひ換へれば自分の話す事を十分徹底せしめようとするには如何なる術を用ふべきであるか、といふ事に就いて私が些か研究した次第を一通り申し述べまして、大方諸賢の叱教を願ひ度いと思ふのであります。

話 術 の 研 究 目 次 終

觀念聯合(ベイン氏).....	一一〇
類似の聯想.....	一一一
類同對比の聯想.....	一一二
圓珠尼の歌.....	一一四
擬人法.....	一一六
お伽話.....	一一七
接近の聯想.....	一二九
同在の聯想.....	一二九
繼在の聯想.....	一三〇
譬喩の二種.....	一三一
仙崖の贊.....	一三三
政客と薩摩芋.....	一三五

私の考に由りますと、話術といふ事には理論と實際との二方面があるべき筈であると思ひます。何事でも左様ですが、兎角一方には理論にのみ走る者が有るかと思ふと、又他の一方には實際ばかりを重んずる癖があるもので御座います。此の話術の如き場合に於いては理論の方面も勿論肝要であると同時に實際の方面も亦一層大切であります。

話術は其の名の示す通り術でありますから、如何程之れに關する理論に精通したからと云つて、必ずしも實際に臨んで巧妙に話せるものでも無く、夫れ相當に實地練習の功を積まなければならぬ筈のもので御座いますから、私は此の理論と實際の兩方面を程よく調合して而も實際に話しをする時に役立つやうな事柄を順序を立て項目を

分けて申し述べて見ようと思ひます。

未熟な私などが事新し氣に申すまでも無いことでは有りますが、言葉位靈妙を極めたものは他に無いやうに思ひます。之れを運用する人の技倆次第で如何様にも形を變へ姿を繕つて呉れまして、殆んど吾人の意の儘にどんな註文にでも應じて呉れるので御座います。従つて、此所に忘れてならぬことは、言葉其のものが直に話者其の人の人格を代表して居るといふ事でありませう。人格の高いお方の口からは矢張り偉い意味を具へた言葉が發せられますと同一事に、人格の低い人の唇からはどんなに修飾を加へましても矢張り野卑な意味を持つた言葉が出て來るといふのは誠に致し方の無い次第で御座います。人柄に品格の高い低いがある通り言葉にも品格の善悪がある

ので御座います。
 夫れから又、言葉を受取る側即ち聴者の方から言つて見ると、それが爲めに手を確か握つて感奮興起する場合もあれば、怒らされ笑はされたり、泣かされたりする場合もありまして、言葉がまるで五尺の男子を手玉に取る観が有るもので御座います。
 私は元來他人の話を聴く事が大好きで、而して又人の前に起つて話をやる事も嫌いでは無いものですから、如何かして幾分なりと筋道の通つた話術と云ふものを研究して見度いと思ひ立つたのが茲二三年前からの事でありまして、其後は勉めて話の上手と評判のある方々の講演を伺ひもしたり、手の届く限りは種々の書物を讀んでも見たりして、辛つとの事で自分だけでは先づまあ斯んな事では有るま

いかと思へる程に取り纏めたのが此の一篇であります。其れを臆面も無く世に公にして先輩諸賢から散々に喰はれようと云ふ不届千萬な覺悟を決めたので御座います。
 身の程を知らない申分ではありますが、隣の糠團子と云ふ事も御座いますから、萬々一此の一篇が日々教鞭を執られて居るお方や、講演講話をなさる方々に對して、爪の垢程なりと御参考になるやうな點があるならば私は眞實それを望外の幸と思ふのであります。

話術と教授との關係

教育学の書物を繙いて見ますと、其の中に教授の原則として豫備、提示、連結、總括、應用などと稱する段階が列擧せられて居ります。

心理學を多少心得た者ならば成程是等の段階を踏んで教授すべきものであると云ふ理由を容易に合點し得るのであります。私は今日まで、是等教授の段階と稱するものは學校教員が教場に臨んで生徒に教授を爲す場合に限つて用ひらるべきもの、即ち教授法の原則としてのみ有效なものであると考へて居たのであります。所が豈圖んやです、該の教授の原則がそつくり其の儘我話術の基礎を爲すものではありませんか、此の事に氣付いた時は不肖の身に取つては一大發見でありますから、コロンブスが米大陸を發見した時のやうな氣持で獨り窃に雀躍して喜んだので御座います。其れから後は私の話術研究の前途に豁然たる曠野が展開された如き感じが致しましたから、一層精を出して知名の方々の講演を承り、

更に進んで講談落語は勿論の事、彼の浪花節や義太夫の如き所謂藝人の演ずるものまでも盛に聽いて而して心靜かに講話講談の筋道を力の及ぶ限り解剖して見たのであります。所が、奇妙と言はうか不思議と言はうか、どれも此れも悉く教授の段階と符節を合せたやうにビタリと一致して居る事を知つたので御座います。然らば豫備、提示、應用等の諸段階をば話術の基礎として如何やうに應用すべきかと申しますと、夫れは後に至つて話材の排列といふ標題の下で詳しく述べますから、茲では單に教授と話術との原則が全く一致して居るといふ事を大膽に發表するだけに止めて置きます。同一の事項を教授するに致した所で、話の上手な教師が説明するのと話の拙な教師が説明するのでは生徒の理會程度に恐しい程大き

な相違が生ずる者であると云事は誰方にも御異論の無いと信じます。殊に年端の行かない幼き兒童を對手にして修身上の訓話とか或はお伽話杯をしようとするれば餘程此話術の工夫が肝要であります。人に物事を教へるといふ作用は九分九厘までは話して聽かせること云ふ働きでありますから、つまり教授の巧拙は九分九厘までは、話術の巧拙に由つて岐れるのであるといふ事が出来ます。眞に巧妙に話された事柄は、深く聽者の腦髓に泌み込んで殆んど一生涯忘れる事の出来ぬもので御座います。私が十歳の折、通學して居た小學校に原田先生と申すお方があつて、夫れはくお話の上手なお方でした。が、其の先生が毎週一度、全校の生徒を階上の廣間に集めて、ほんとは面白いお話をして下さいました。當時の溢れる許りに愛嬌を湛

へた先生のお顔や身振り手振りなどまでが、三十年を経た今日でも有り々々と眼の前に見えるので御座います。而して、其の時のお話が谷將軍熊本籠城の一件で、遂々斃れた馬の肉を食つて、辛つと飢渴を忍ぶ悲愴な状況から、凝つと思案に沈んだ將軍の居室の扉へ密つと人の近寄る氣配がする、深夜に及んで忍びの足音、ハテ合點な行かすご、谷將軍は低いけれど力の有る聲で、

「何者かッ。」

と叱した時、扉の外では、滅入るやうな微かな聲で、

「ハッ、私で御座います。谷村計介で御座います。將軍へ折入つてお願い致し度い事があつて推參致しました。」

……夫れから計介は愈重大な役目を申付けられまして、許した將

軍も、願つた計介も、感極まつて共に泣き崩れた。と云ふ勇士の美談で御座いました。現今小學校で使用して居る國定修身書にも此の物語が載せてあつて而も結構な挿畫までも加へて有ります。私は自身右の如き經驗を持つて居るから、小學校の修身書を見る毎に、歴々と當時の光景を想浮べて誠に懷舊の情に堪へないのであります。若しも總べての教授が、原田先生の熊本籠城談の如くに、生徒の腦裡へ深い強い印象を與へる事が出来るものなら實に結構な事であると思ふのであります。

實際私共が所々方々の學校へお邪魔に出まして御教授振りを拜見しました中には、教師の語の使ひ方や言ひ廻し方が如何にも巧妙で痒い所へ手が届く爲に其の教師の教授が眞に晴々して其の人の一言一

語が悉く生徒の肺腑にピタリと判を捺したらうと思はれるやうな授業を観せて頂く事があります。斯やうな場合に於いては、教授者の一言一句は丁度催眠術の暗示即ちサゼツシヨンの如くに生徒の心へ強く々々痕を遺すに相違ありません。左様かと思ふと、又一方には理論上では誠に申分の無い極めて立派な教授案を作製せられてありながら、其れを携へての實際の教授を拜見しますると、教授者の話方が遺憾ながら拙劣であるが爲に、教授者御自身は汗を流さん許りに努力せられて居りながら、聴く者の身になつて見ると説話の要領も捉へ難く段々倦氣が催して來るばかりで、終には欠伸を窃さ噛み殺して其の場の體裁を繕つて居るやうな次第で、一向感興などは起りもせず、其の教授の濟んだ後で、

「マア助つた。」

と言つたやうなうんざりした顔付でホツと一息を吐く事もありま
す。

一教室内で數十人の生徒を相手にしての授業でさへ右の通りの實例
が有るので御座いますから、是れが幾百千人といふ多数の生徒を廣
い講堂若くは運動場に集めて訓話でもしようとする場合、若くは父
兄母姉會などの席上で話をして、學校の希望を保護者へ徹底させよ
うとする時などは、此の話術を餘程巧妙に運用しなければ所期の
効果を收み難くい事になります。

殊に、現今頻りに喧く言はれて居る所の通俗教育に關する講演會な
どの講話でもしようとするならば、是れは又一層話術の手續を要す

ることは勿論であります。即ち聽衆の方が老若男女の入り雜りで、
年齢も境遇も而して又智識の程度も種々異なつて居るもので、群衆
心理學で申す所の異類群衆でありますに由つて、是等維多入り交り
の聽衆へ向つて講話の目的を徹底させるには是非とも話術に熟練す
る事が必要條件となるので御座います。

話術の研究法

然らば、此の話術は如何にして研究するかと申しますと、つまり左
の三ヶ條に過ぎないのであると私は考へます。

- 一、成るべく多く他人の話を聴く事。
- 二、成るべく多く書物を讀む事。

三、成るべく多く話をして見る事。

習らうより慣れろで、聴く事も読む事も話す事も成るべく多くして出来る丈澤山な経験を積む事が最肝要で御座います。

成るべく多く聴くが良いと言つた所で唯漫然と聴き過ぎて了つては勿論研究にはなりません。他人の話を凝つと耳を澄ませて聴きながら、又終りまで聴き取つて了つた後からでも宜しいから、聴いた話の結構即ち組立を十分解剖して見る事が話術の研究になるので御座います。

話の性質が議論と稱すべきものであれば尙更の事ですが説明と稱すべきものであつたとしても、第一に、筋道が一貫して居るかどうかいひ換へれば論理學上の誤謬は無いかどうか、といふことを調べて

見なければなりません。是れを通俗に申しますれば話の筋道に無理があつてはいけないといふ事です。何故なれば、主義一貫して論理の整つた話で無ければ正しい思想を發表されたものと言ひ得ないからであります。他人の話を聴くにしても、先づ此の論理上の基礎に注意して見る事が大いに必要で御座います。

其れから又、如何なる話講演に於ても、苟も一ツの纏つた話であるならば、屹度其の話の心棒となるべき大切な主眼點が無ければならぬ筈であります。主眼點といふものは、話をする人から云へば、其れが自分の話をする目的で御座います。故に、餘り調子に乗り過ぎて、ひよつと該の目的を逸して了へば、折角苦心努力した一場の話も、全く水の泡に歸して、骨折損のくたびれ儲けといふ飽氣無い

姿になつて了ふ次第であります。
 右の主眼點即ち話の目的は、大抵話題又は演題として壁上に掲げられてあるのが通常ですから、私共が他人の話を聴きに行つて先づ話題を讀めば、

「ハハア彼の意味の話があるのだな。」

と合點が參るのであります。若し又、話題を見ただけでは何の話であるか全く見當が着き兼ねるとした所が、能く心を落ち付けて其の人の話を聴いて居さへすれば、容易に主眼點を捉へ得るもので御座います。

話題の撰び方や主眼點の置き場所はどうか宜いか、其れ等の事はズーツと後で、話材の撰擇及び話材の排列といふ標題の所で私の

考を申し述べる筈で御座いますが、兎ても角でも、他人の話を聴いたらば、該の話の主眼點が話の始に置かれて有つたか、或は中間に置かれてあつたか、夫れとも又終りに置かれて有つたかを調べて見る事が肝心であります。尙進んでは、其の置場所の適不適をも考へて見るのです。若し自分が代つて話をしたならば如何にしたらうかと心算に研究して見るので御座います。

次には修飾の事を研究して見るのであります。食べ物にした所が如何に新鮮な品でも原料だけでは舌鼓を打つ譯にはまありません。醬油や砂糖や又味淋などを以て調理鹽梅すればこそ健啖家に涎を垂れさせるので御座います。話に於ても全く其通りで、主眼點がどれ程大切だからと言つて、主眼點の一點張りでは誠に面白く無いもので

あります。其所で修辭上の事柄を應用して話に修飾を施す必要が起つて來るのであります。彼の照應とか抑揚とか頓挫とか申すところが即ち是れで御座います。故に他人の話を聴きましたならば、彼の演者の用ひた語句の配置按排は如何で有つたらうか、即ち修辭上の結構はどうであつたかと退いて考へて見るのであります。尙又音聲の調子や目の働かせ方や身振り手振りや姿勢態度等夫々攻究して見る事が頗る肝心な事で御座います。其の中でも聴衆が泣かされた時、笑はされた時、扱は拍手喝采した時の瞬間の考察が最も必要であります。上手な人の話を靜かに聴いて居りますと、誠にチヨツとした微細な調子や身振りで、多くの聴手がポロリ／＼涙を滯して泣き出しまして、彼所でも此所でも白い手巾が頬の邊にチラホ

ラ出掛けるもので御座いまして、其の有様を見渡しますと自分も遂に貰ひ泣きをしてしふものであります。私の經驗に由りますと。斯やうな場合は主として話者の音聲と身振りから釣り込まれるやうに思はれます。此の事に就いては、又後になりました、模聲及び模形と音聲との題目の下に詳しく申し述べる積であります。右に列擧した諸點に注意しながら、自分は暫く批評家の態度を保つて他人の話を聴いて居りますならば、彼の知名な講演家の話が最價値ある模範となる事は申す迄も無い次第ですが、其の他講談とか落語とか浪花節とか義太夫とか乃至は説教法話の如きものを聴きましても話術研究上大なる参考材料となるので御座います。以上は成るべく多く他人の話を聴く事に關係して研究法を申し述べ

たので御座いますが、第二條に擧げました所の成るべく多く書物を讀むことに就いても右ご全く同様の注意を要するのであります。讀書は即ち話材蒐集の唯一の方便で、讀書の貧富と話材の貧富とは正比例するものであらうと思ひます。讀書する分量が貧弱であれば話者の貯蓄して居る話の種も亦從つて貧弱であるに相違ありませんから、話術研究上第二の要件として成るべく多く讀む事ごいふのを擧げた所以であります。

唯書物を讀むと申しましても其の讀み方に種々違ひがあります。所謂漏斗讀は駄目で御座います。ザアツと讀み込んだと思ふご直ぐに尻の方からザアツと流れ出て了ふのであります。此種の讀み方では話材取入れの讀書としては全く效の無いもので御座います。書物を

讀んで直ぐ解るといふ事は誠に結構なことではあります。其の代り直ぐ忘れて了ふといふのは此所で申す所の讀書法の趣意に副ないので御座います。然らば、如何なる讀み方をせねばならぬかと申しますならば、讀んだ中から、取るべきものは取り、棄つべきものは棄て去つて、該の要領をきまりよく確保して行くのであります。世間で書を讀んで眼光紙背に徹すごいふ事を申しますが、多分此の讀み方を指したもので御座いませう。尤當今は千里眼だとか念寫だとか頗る不思議な心の働きが喧しく傳へられて居りますから、事實眼の光が紙の裏まで貫き透したのかも知れませんが、其の邊の事は皆様の御判断にお任せ致し度いご考へます。

世に知られた方々が何所かの席上にて話された講話や講演の速記録

を讀みますならば、獨り話材蓄積の方便なるばかりで無く、話し方の考察も出來ますから、是れは一舉兩得で、第一と第二の兩要件を同時に充たす譯になるので御座います。唯、音聲の使ひ分けや身振り手振りなごいふ側の事が現はれて居ないのが直接に聴くのと異なる點であります。其の代りに話の組立方や修辭上の結構などを緩つくり十分に取調べることの出來るといふ話術研究上至極大切な便利を與へて呉れます。

日々配達して來ます所の新聞紙の講談物などに致しましても娛樂旁讀んで見ますと、中々捨難い節々があるもので御座います。例へば、

佐地越前守の量見では。腹を切ると云つたならば。止めるだらうと思つた。所が腹を速かに切れと云ふ。そこでムラ／＼と致しますと。固より少量な奴だから、越

然らば切腹いたすで。美事に腹を切れ。此方見届けて得さする。な、汝、で切腹いたすと云ふことは。流石殿下より一萬石下されただけあつて。感心いたした。美事に致せッ」と云つて見張つて居る。進退ならぬ所の手詰めの談判になりましたから「然らば腹を切ります」と。兩肌を脱ぎ。刀をギラリと抜くと衣類に捲き左の脇腹へ突立て。ドツと掻き切りました。

(讀賣新聞所載後藤又兵衛の一節)

流石に商賣人の講談だけあつて實に巧妙の話し方で御座います。是れを何の氣なしに讀み過して了へば夫れまでの事ですが、假にも話術の研究をして見ようといふ心懸けの有る者が少し氣を付けて調べて見ますと、種々参考となる事柄が此の中に含まれて居りまして

「成る程上手なものだなア」

と感心する點が御座います。何れ詳しい事は後に夫々の標題を設け

てお話し致す筈ですから、此所ではチョット重な箇條だけ申し述べることには致しませう。

第一に大して六ヶしい言葉を使はず、世間の人に解り易い言葉だけを使つて十分に意味を表した事でありませう。斯やうな事は容易なことに思はれて、實は頗る困難なことであります。聴衆が子供であるならば子供らしい言葉を使つて十分に解らせることが肝心であると、は百も承知をして居りながら、扱實地に臨んで見ますと、どうも堅苦しくて通の悪い言葉が出たがつて仕方が無いもので御座います。まして、群聚心理学で申します所の異類群衆に向つて話をするに、通俗な言葉を成るべく多く使はうとする事は尙々數層倍困難な事で餘程話に慣れた人で無ければ自分の思ふやうに行かぬもので御座い

ます。

假りに前文の

「止めるだらうと思つた。所が……」

の所で意外案外の意を十分強めようとする積りで

「止めるだらうと思つた。然るに豈圖んや……」

としたのでは、越前守が圖星を指されてギクツと參つた意味あひが現れ損ふ許りで無く寧ろ滑稽に聽えるのであります。唯

「然るに……」

だけでもどうも面白く無い、それを

「所が……」

と軽く出て却て越前守が當惑の狀を十分に寫して居るやうに思はれ

又 ます。

「固より少量な奴だから」

の所で、奴の一言葉だけで十分越前守が英傑で無くて極めて小人物で有ることを卑下して居ります。故に其の次の

「然らば切腹いたすでム」

と云つた言葉が自然沈勇な態度を缺いて、如何にも口惜し紛れ苦し紛れになつて、捨鉢の言葉に聽える感じが致すでは御座いませんか後の

「然らば腹を切りまする」

と云つたのも、言葉だけでは如何にも落付いた覺悟の決まつた者で

あるべきものが、讀む者には却つて反對に侮蔑の感を惹き起さしめる、其の手際が如何にも鮮かだと思ひます。

第二に話中、人物の地位境遇に應じて夫々言葉が使ひ分られて居る事です。

「然らば切腹いたすでム」

又同人が

「然らば腹を切りまする」

と言つたのに對して

「美事に腹を切れ。此方見届けて得さする……感心いたした。美事に致せッ。」

と言つて、地位の上下を明かにし身分に應じた假聲を使つて居ります。此等の事柄は又例に依つて後に「話術と言葉」の所で緩つくり申

し述べ度いと思ひます。

第三に模聲が上手に使はれて居ることです。

「兩肌を脱ぎ、刀をギラリと抜くと……」

を

「兩肌を脱ぎ刀を抜くと……」
でも解ることは解りますが、誠に間がぬけて一向情が移らなくなり
ます。次の

「ドツと搔切りました」

も同じ事で

「ドツと」

と模聲を加へた爲めに、腹へ刀を突き立て、バツと血汐が迸つた有

様を如何にも眼の前に見が如く讀者に推察させるので御座います。

話に力を付け興味を持たせ聴く者を感じせしめやうとすればどうして
も此の模聲を適當に使ふ事が入用になつてきます。尙模聲の事や模
形と言ふ事に就いては項を改めてお話し致す考で御座います。

ザツと申しましたも、右の通り種々話術研究の材料が得られるので

ありますから、慰みがてら讀むべき新聞紙上の講談の斷篇でも中々
ゆるがせ

忽には出來ぬもので御座います。名高い人々の演説や講話を其儘速
記したものを讀んで見ますと、如何にも中身が立派で十分な重みが

ありますから、話術を研究する者にとつては寧ろ頭腦を作るごいふ
方に利目が有ります。之れに反して、前に掲げた講談の如きものは
中身は誠に軽いもので御座いますから、私共に智恵を付けて呉れる

ことが先づ無いと云つて宜しい位なものであります。其の代り話の仕方を調べる爲めには最も效驗の著しいもので、此の方の事にかけては講談の上を越すものは他に無からうと思はれます。

話術研究法第三の要件は成るべく多く話して見る事です。第一條に挙げましたところの成るべく多く聴くことも、又第二條の成るべく多く讀む事も、畢竟此の第三の要件即ち實際に自分で話をする爲めの用意に過ぎ無いので御座いますから、研究法と致しましては成るべく多く實地に話して見る事が最も肝要であるのです。

話をする前には、彼も言つて見よう、此うも話して見ようと、種々お腹の内で仕組を立て、是れならば大丈夫聴衆に満足と與へるこゝとが出来るに相違ない、と考へて、扱、愈々講壇に起つて見ますと

サア案外なもので、ギツクリ／＼言葉が喉へつかへて容易には出て来ません。折角前に仕組を立て、置いた事は、殆んど何等の役をもなさいといふやうな感じがして、自分ながら愛憎もこそ盡きて了つてガツカリ失望するもので御座います。

總じて辯士には三つの時代がある、といふ事を申される方が有りますが、至極尤なお話と思ひます。第一の時代は、話者が全く初心の時であります。始めて演壇に登つて見ますと、ブル／＼慄へて身體が如何にも落着かないで、足を確かり踏み付ける事さへも出来ません、どうも困つた者だと思ひながら、ヒヨイと頭を擧げて聴衆の方を見ますと、人々の顔も判然とは見別けが付かず、左様かと思へば一ツの顔が二ツにも三ツにも見えますやうな次第でありますから妙に

舌が硬張つて話す事も徒らに忙々しく急ぎ込む許りで、話の筋道も後や前と混雑を致します。自分では餘程十分に行つて退けた積りでも、壇を降りてから考へ直して見ると、彼の事を話さずに了まつた此の事が脱けて居た。といふ風で、十だけ話す考で有つたものが僅かに六か七までしか話せぬものであります。

初心の時代には、聴衆の顔振れが違つても、又場所が變つても、其の度毎に間吳付くもので御座います。平常學校で生徒等を相手にし慣れた教師が、稀れに父兄や保證人を講堂に召集して話をしようと思つて、どうも平素とは勝手が違つて、思ふやうには話が出来ない、生徒の前では大層話の上手な先生が、どうしたものか急に憶氣が出て、恰も猫に睨まれた鼠の如く窄んで了つて、折角の話も十分

に徹底し無い事があります。是れは全く相手が平素と異なつた爲めに話者の心持が平靜を失つた結果で御座います。其れと同様に、平常講堂や會議室の如き規則正しい場所でのみ話をし慣れた者が、突然劇場や寄席のやうな所で話をしようとする、是れも亦中々調子が狂つて來ますから、存外見當違ひをするもので御座います。

第二の時代は、生慣れの時であります。自轉車の稽古でも同じ事ですが、極乗り始めの時代には、小心翼翼々として少しも油斷せず、後生大事とハンドルを握つて居りますから、割合に怪我も有りませんが、少し許り乗り慣れて來ますと、ソロ／＼生意氣の心が出て來るものですから、狭い橋を無理に渡つて見る氣になつたり、人や車の混雑する中をも通り抜けて見ようといふ氣持になつたり、折々は手

離しの曲乗りを行るやうな事で、却つて是れが大疵の素となつて、思ひ懸け無い失敗を招くので御座います、話術の事も全く其の通り此の時代は冒險的で大膽な時代でありますから、演壇に登ると、天下は我が物と云つた氣持で、話者自身は心中愉快で堪らない、始から聴衆を呑んで掛つて居るから、舌が顎にブツ突かり次第にペラ／＼と喋つて了ふ、其所で遂ひ言はでもよい餘計な事まで言つて了つて十だけ話す筈のものが十五にも十六までにもなると言ふ有様で御座いますから、此の時代が最も危険で最も失敗を招き易い時であります。

第三の時代は全く成熟の時代で御座います、段々場数を重ねて此所まで到達しますと眞に話術に成功した者と謂ふ事が出来るのであり

ます。此の時代の話者になりますと悉く熟練して参りますから、或は時間の長い短いを考へたり、場所柄をよく辨へて話術の上で夫れ相當の注意を致します。夫れから又、聴衆の顔振れ次第で、子供には子供らしく、老人には老人らしく、貴賤貧富老若男女の別に依り相手の器に随つて夫々に應じた話方を致しまして、話者の態度は如何にもゆつたりして十分に落着きがあります。でありますから、自分か話さうと思つた丈を話して程可い所で切り上げて、スーツと靜かに演壇を降る、といふ風になるので御座います。

世間には話の天才と云ふ者があつて、始めから上手に行れる人も有りませうけれども、其れは實際例外であつて、先づ、普通の人は段々と場所を踏んで來て慣れた結果、第三の時代に辿り着くべき筈で

御座いますから、成るべく多く話して見るといふ事が話術研究の上には最も必要な条件となる理由であります。是れで話術の研究法として肝要な事は大體お話をした積であります。が更に話術の補助をして呉れる學科の事を左に少しく申し述べようと思ひます。

話術の補助學科として直接に最も必要なものは教育學教授法及び心理學で御座います。別して群衆心理學には餘程精通して居る事が必要であると思ひます。彼の講話演説家が滿堂幾百千といふやうな多勢の聽衆を悉く酔はせて了つたり、思はず識らず掌に汗を握るほどの感奮させようとするには、此の群衆心理學が教へて呉れる所の理法に依つて成功する事が多からうと思ふのであります。上手な話者が

聽衆をヤンヤと擾がせるのは全く群衆心理の理法に據るに相違ないので御座います。教授法や心理學や殊に又群衆心理學が話術の基礎としてどれ程大切な學科でありますか、其れは是れから順次申し述べる事に由つて十分御承知を願ひ度いのであります。

右の他、前にお話いたした論理學も話の筋道を立て、正確な考を述べる爲めに必要でありますし、修辭學は言葉の組立やならべ方に就いて是非知らねばならぬ原則を示して呉れますし、聲音學は聲の出し方や使ひ方や、別けても喜怒哀樂の情をどういふ風に現はすかといふ大切な事柄をも話術者に供給して呉れます。尙詳しい事に至つては夫々の場所では自然お話し申しますから茲には略しまして次の標題に移る事に致しませう。

話術と群衆心理

人間一人を差して個人と申します。該の個人が多数集つたものが群衆でありますから、一寸と考へると個人の心理も群衆の心理も全く同じ事でありさうなもので御座いますが、其れが抑間違ひで、個人の場合の心の働き方と、群衆の場合の心の働き方とは、其の間に大層を相異があるのです。人間の心の働き方は誠に奇妙不思議なもので、個人の時には理非の辨へが極めて鋭敏なものでも、扱其れが群衆の一員となりますと、悉く野次馬に化けて了びまして先程の思慮分別は忽ち姿を隠し形を消して、最早理非の辯解はまるで耳には這入らず、其の場其の時の人氣に乗つて他人の言葉を聞き軽々しく

事を爲すものであります。

個人としては、斯くせねばならぬ、此くすべきである、といふ風に責任の考があるものです。それが、一旦群衆の中へ捲き込まれますと、全く責任の考を失ひまして、何でも構はんから行つ付けろとか、撲つて了へとか云つたやうな極めて亂暴な行動を取りまして、他人の邸宅内へでもドヤ／＼侵入致して手當り放題に器物を打ち毀し、瓦石を投げ、土砂を飛ばし、揚句の果には交番の焼打など、云ふ大反れた騷擾を惹き起すもので御座います。群衆の人氣が

「行つ付けろく」

と叫んで、ワアワアと勢が付いて來たら最後、全員悉く盲目となつて、如何なる暴動でも遂行する、火でも水でも持つて來いと云ふ凄

まじい状態に立ち至るので御座います。斯やうな大珍事が僅かに首領の手の振り方一つで爆發するといふ事ですが、皆様何と恐しいで
はありませんか。
人氣が立つて居る時は實に恐しいもので、彼の明治卅七八年戰役當
時に

「露探」

といふ言葉がどれ程強く私共の心を激動させたかは諸君のよく御承
知の事で御座います。夫れから又、或將軍が卑怯な振舞があつたと
いふ評判が何所からとなく擴がつて、將軍の留守宅へは石を抛り込
まれる、令息令嬢は學校で苛められたといふ事もありました。
要するに、群衆は智的のもので無くて全く感情的で有ると云ふ事が

出来ます。感情ばかりが徒らに亢ぶりまして、理屈は少しも解らな
くなり、悉く無責任になるものであります。其所で、群衆を相手に
する話術即ち大勢を相手に話をする時には細かい理屈は成るべく避
けて言はぬやうに致します。是非とも話さねばならぬ理論なら、極
々平易に極々具體的にして解り易く簡單なものが適當するのであり
ます。出来るだけ噛み砕いて、何人の耳にも這入り易いものに限る
ので御座います。

夫れにしても、何々演説會とか、某講演會とか、一定の會場に乘つ
た群衆は、是れは既に演説なり講話なりを聴かうと思つて來た連中
でありますから、話をするにも餘程樂な點がありますが、彼の大道
演説などとなつては、聴かうが聴くまいが、各自の勝手でありますか

ら、十分這般の氣合を呑込んで居て、理屈目いた話は抜きにして聴衆の心情を唆るやうに話し込んで行かなければ中ら立止まつて此方の話に耳を貸しては呉れぬもので御座います。

「是れは極々秘密ですが……」

とか

「チヨイと」美代ちゃん、貴嬢だけにお話するのよ、だから、何人にも知らせては

いけない事よ。……」

とか前置してヒソ／＼聲で話し掛けますと、相手は意外な顔付をして熱心に耳を欬てまして片言寸句も聞き漏すまいと云つたやうな氣持で釣込まれて来るもので御座います。而して、秘密であるとか内所であるとか、又は何人にも話しては可け無いと斷つて、堅く口止

めをしようとするればする程却つて激烈な勢で世間へ洩れる、人の口には戸が閉てられ無いもので、當人は餘程堅固に密封した積りの内所が意外にもバツ／＼世間に噂されて居るもので御座います。伊藤公の艶事が當時の新聞に素破抜かれたことも、醜議員の内幕や貴婦人連の役者狂ひ、又は貴族社會の家庭の紊亂や其の他の秘事が、何時の間にか世間へ知れて、夫れから其れへと喧しく傳へられますのも皆此の理由に依るので御座います。

總じて

「不思議な事には……」

とか

「怪しい事ですが」

とか

「諸君僕は唯今意外な飛報に接しました。其れは斯うです、……」

とか言ひ出すと、一般聴衆は怪訝な顔して聴耳を起てるものであります。而して、其の話が非常な勢力を持つものでありますから、話者が此の調子を能く合點して、唯一言、寸鐵人を殺すと云ふやうな警句を使つて、群衆の至極興奮激昂し易い性質へ火を點けて煽り立てましたならば、該の話は頗る力の有る暗示となつて聴衆の心の裡で働きますが、雲霞の如く群がる聴衆も全く話者にチャームされて了ひまして、其の一顰一笑が直ちに聴衆へ乗り移り、偉大な影響を惹き起すことになるので御座います。群衆を一つ動かして遣らうといふ意氣込の辯者が、スカタ々と進ん

で演壇に突起ち上りまして、いきなり

奮起せよ諸君！諸君にして起たずんば我が國は亡びてしまひますぞツ。

と、如何にも慷慨悲憤な激越な調子で叫び立てますと、元來が理智に疎くなつて感情にのみ激し易い群衆の事でありますから、忽ち

「行つ付けろ。」

と言つて奮ひ起つて來るのであります。之れを括つて申すならば、群衆を奮ひ起たせようとする註文の時には事を大げさに言ふことが必要であるといふので御座います。

彼の西郷隆盛が薩摩に引込んで私學校の世話をして居た時分の事で

すが、私學校黨の數名は間諜となつて東京に入り込んで居りまして、始終大久保利通の舉動を監視し、大久保公の一舉一動を蚤取り眼で調べ上げて、事細かに鹿兒島へ注進したもので御座います。何でも、私學校の連中から見ますと、大久保公は非常な奸賊で常に我儘を働いて居る佞臣ご思はれたに相違ありません。大久保公が憎くて々々堪らない、不俱戴天の仇敵と認めて居りました。でありますから、私學校の連中が寄ると觸ると屹度大久保公の悪評で話を持ち切つて居る、腕を扼して口惜しがつて居る、

「ヤレ大久保は此れく斯くくの都合な振舞がある。」
 とか

「大久保は佞奸邪智に長けたる國賊であるから斬り棄てねばならん。」

とか言いひ嘸して居りました。其所へヒヨツコリ東京から歸つた間諜の一人某と云ふ者が

「諸君！ 此の寫眞を觀給へ。如何にも宏壯華麗を極めた建物ではありませんか。何と堂々たる西洋館ではあるまいか。諸君能く見よ！ 刮目して視よ！ 之れぞ大久保の邸宅で御座る。彼れ奸賊は此の如き邸宅に起臥して驕奢を極めつゝあるのです。……。」

と一葉の寫眞を振り翳しながら悲憤に堪へざる様子で一場の報告演説をしたのであります。然なきだに不平滿々の私學校連は、サア斯うなつては矢も楯もたまつたものでは御座いません、ワアツと関の聲を揚げて疊を蹴つて起つたのであります。所が、後にあつて該の寫眞を克く克く調べて見ました所が、何の事

でせう、大久保公の邸宅とは似ても付かない全く別の建物で、現今の印刷局を撮影したもので御座いました。今になつて考へて見れば誠につまら無いお臍で茶を沸かすやうな話では御座いますが、併し群衆心理の特色は此の話の中に遺憾なく暴露されて居りますから、此の邊は話術研究者の一工夫を要する點で御座います。

右の如く、物事を誇張して大袈裟に言ふ事は、話術の上に應用して折々功を奏するもので御座います。獨り話術の上と許りは限らず、詩文の方では常に應用されて居ること、殊に支那人の詩文に多く見る所であります。

白髪三千丈 怒髪天を衝く。

何んば大きな人間であつたにしても、まさか白髪の長さが三千丈も

有つたごは受取れませんし、如何な豪傑が烈火の如く顔を眞赤にして怒つて見た所で、突立つた毛髪が天まで届いたりする程長かつたとは實際に有り得べからざる事ですが、其所が私の申し上げた故意ご物事を大げさに言つて

「ナール程、でつけえものだなア。」

ご思はせる手段で、つまる所は、讀者を動かすの一件に過ぎないの御座います。

話者の立場として、どうにかして聴衆の耳を自分の方へ引き附ける工夫が肝心で御座います。其の方法としては、前に申し述べた如く、物事を誇張して大げさに發表するここが最も有力な方法に相違無いのですが、更に話術の上から見て尙一ツ附け加へてお話し申し度い

事柄が御座います。群衆に對つて話をする時には、ごうも平凡な事や波瀾の無い穩かな話は反應が薄くて利目が乏しいものであります。ズンと珍らしい事か、突飛な事か、さも無くば奇矯な事柄で、調子外れの、人間を茶化したやうな話が、一番よく聽衆の耳目を自分の方へ引き付け易いもので御座います。例へば

昔、一茶といふ俳諧師が居りました。彼の名高い芭蕉と同じやうに頗る禪機に逸脱した者で、富貴や權勢は恰も浮いた雲の如くに看過して、金錢などには目をも呉れず、信濃國に假りの庵を結んで、極めて氣隨氣儘な月日を送つて居りました。何がさて、一茶ほどの俳諧師でありますから、諸國の大名からは實にうるさい程台抱へ度い／＼といつて懇望して來ましたが、元來が俠骨肌の一茶の事であるから、其の都度氣持の好い程キツパリと斷つて了ひました。

或日のこと、加賀の前田侯が、江戸へ參勤の途すがら、柏原驛にお泊りになりまし

た。丁度好い折であるからと云ふので、特別に家來の者を使者に仕立て、美事な乗物までも用意させて一茶をお召しになりました。所が、一茶は「拙者は金も名譽も欲しくは無いから往くのは否ぢや」と膠ない返事、辭を竭して頼み入れても一向承け引く氣色も見えませんでしたので、使の者も詮方なく、スゴ／＼と立ち歸つて、早速主君前田侯へお目通りを致し斯くと申し上げますと、侯は之れをお聞き遊はして大層御立腹かと思ひの外「フム左様か、予が招いても來ぬと申して斷るとは天晴れな奴ぢや。聞きしに勝る氣骨者ぢやナ。」と仰せられて頻りに感心してお居になりましたが、聽て「然らば致し方無いに依つて、更めて一句所望して參れ。」と家來へ仰せ付けられましたから、件の使者は直ぐさま一茶の許へ取つて返し「是非に一句」と乞ひますと、一茶は事も無げに筆探り上げてサラ／＼と認めましたのが、

何の其の百萬石も物の量。

一説には「何の其の百萬石も笹の露」と申して居ります。

といふ俳句で御座います。前田侯は手に取つて熟々と御覽になりましたが、今度は心中甚だ面白く無いから、僅かに金七兩を贈つて潤筆料と致した許りでありました。其れから七年経つて後のことですが、前田侯が再び柏原驛に宿をお取りになりました。不圖一茶の事を思ひ出されて、又々家來を一茶の許へお遣しになりました。家來の者が早速一茶の庵を訪ねて見ますと驚いた、此の眞晝間に燈火を點けてグウ／＼軒を叩いて睡込んで居る、仕方が無いから「御免々々」と近所合壁を驚かすやうな大きな聲で呼び起しますと、ア、と一欠伸「誰ぢや、何者ぢや苦しう無い這入らつしやれ」と睡眼を摩り／＼、垢に染まつた衣を着て、顔も洗はず洒々として居る、流石の使者も呆氣に取られて、暫しは二の句もつげず、入口に起つたまゝヒヨイと部屋の中を見廻はしますと、片隅の所に七年前に贈られた金子が封をしたまゝ埃だらけになつて轉つて居りました。

と云つたやうな禪味を帯びた話で人の意表の外に出る事を話します

と、聴衆は存外耳を傾けるもので御座います。當世の如く一にも金二にも金で、金が敵の世の中では、金が有つたなら……と誰しも考へて居ります所へ、一茶の如く金や位に心を動かさず……前田侯何んする者ぞ、百萬石を鼻に掛けるがチャンチャラ可笑しい、百萬石と言へばチョツト偉らさうに聞えるが、百萬が二百萬でも、畢竟は物の數に過ぎぬのぢや、悟つた俺から見りやつまらねえものよ、フ、ムー。……と嘲り去つた一茶の稜々たる氣骨が痛快に堪へないから、自然今の人情の裏をかけた一種の清涼劑となつて、聴衆に氣持よく受取られるので御座います。斯くの如き事は、話材を撰びますにも、又例話として引合ひに出す時にも、餘程参考すべき事であると思ひます。

總じて群衆を相手として話を致します時には、平々坦々たる鹿爪らしい事柄は大抵歓迎されないもので御座います。故に、極めて穩當な道理を話して聞かせようとするとするにしても、根本の精神を没却しない限りに於いて、幾分か過激な調子に直して話す工夫が肝要であらうかと存じます。でありますから、彼の没趣味な統計的の數字などになりますと餘程話をするに困難を感じるのであります。是非三ツ兒にでも解るやうに極々具體的なものに作り變へて話す必要があるので御座います。此の事は又後に

「話術と譬喩」

の所でお話し申す事に致しませう。
次に述べますことは

「欠伸の傳染」

と云ふ頃目で御座います。つまり、人間が群集して居ります場合には欠伸が夫れから其れへと傳染するものであるといふ事實であります。群集の中の一人がア、ツと一ツ欠伸を致しますと其れが忽ち四方へ傳染しまして、彼方でも此方でも欠伸を始めるもので御座います。最初の唯一人の欠伸が暗示となつて、群衆全體に影響するのであります。此の暗示の勢力が中々侮れ無いもので、是れが爲めに大に話の進行を阻害される場合があるものです。

傳染するものは獨り欠伸のみとは限りません。或一人が便所へ立つと、後から／＼と便所へ行く者が出来る。又或一人がゴホン／＼と咳をし始めると、是れ亦忽ち八方へ傳染するものです。其れと同様

に、或一人が笑ひ出せば、何の意味かも知らずに眞似をして笑ふ者が出来ますし、或一人が悲哀な話を聞いて居りながら遂に我が身の上につまされてすゝり泣きする者がありますと、全く無關係の者までも同様に貫ひ泣きをするもので御座います。實際自分は夫れ程同情も起さず、左程悲しいとは思つて居らなかつたが、ヒヨイと傍を見ると、何家の婦人であるか兩眼を眞赤にして涙をポロ／＼流して、頻りに手巾で拭いて居るので、思はず識らず自分も何故とは知らず涙ぐんで了ふのであります。

話術と群衆心理の關係として最後に申し述べ度いと思ひます事は、話者の資格の一ツとして愛嬌が最大切であるといふことで御座います。演壇に登るが否や苦虫を噛み潰したやうな顔付をして居りま

ては、聴衆の身にあるご早や其の人の話を聞かうと云ふ氣には義理にもあれないものであります。始め無愛嬌と思はれたが最後、其の人の話は最後まで不快の念を以て迎へられまして、折角骨折つた苦心の話も遺憾ながら徹底せずに終ることゝなるので御座います。故に話者としては面相にも身振りにも聴衆を牽き付けて悦服させる程の愛嬌を湛へて居なければ不可ません。畢竟話者の愛嬌は聴衆に對して一種の魔力であります。

話材の撰擇

私共が他人から何か話をして呉れよと頼まれた時、或は又自分から進んで何か話をして見ようと思つた時に、劈頭第一に起つて來るの

は、どんな話をしたら可であらうかといふ問題であります。即ち最も適當したところの話材を撰擇する事であります。茲に、話材の撰擇をなすに方つて忘れてならない四ツの要件があります。

- 一、語るべき相手に適當した材料を撰擇すること。
- 二、話者自ら眞に感じた材料を撰擇すること。
- 三、語るべき時に適當した材料を撰擇すること。
- 四、語るべき場所に適當した材料を撰擇すること。

此の四要件を度外に視て話の材料を定めたならば、必ずや折角苦心した話が不成功に終るのであります。語るべき相手に適當した材料を撰擇すること。

語るべき對手とは自分の話を聞いて呉れる者即ち聽衆を指したのです。第一要件の意味を一口に申しますと、相手を見て話をせよといふ事でありませぬ。

古支那に孔子といふ偉い方がお居でになりました、數多くのお弟子を教へ導かれまする時に、お弟子達が同じ事に入り代り立ち代り孔子へお尋ね致しますと、該の質問に對して、孔子のお答へ遊ばす語が一々異なつて居ります。是れは、孔子がお弟子に十分納得の出來るやうに教へられようといふ御親切から出た事で、同じ事をお尋ねしても、お尋ねする當人の學力に相當したお答をなされて、十分に解らせて遣り度いといふ孔子の老婆心で御座います。例へて申せば、五だけの力の者に相當した事柄は八の力が有る者には易くて物

足り無い感じがありませう、然らばとて、八の力が有る者に相當した事柄は又五だけの力の者には難くて考が届き兼ねる道理であります。孔子がお弟子の學力に應じて教へられた事は諸君が御承知の論語と云ふ書物に見えて居ります。流石に學問道德の神と崇められる程あつて孔子は誠に偉いお方で御座います。

我國にも同じやうな例があります。其れは彼の名高い僧行基で御座います。行基が布教の爲めに諸國を遍歴した跡を調べて見ると實に驚くべき成績を擧げて居ります。如何なる深山幽谷と雖、彼れが一度踏み込んで参りますと、忽にして寺院が建立せられ、道路が切り開かれ、瞬く間に橋梁が架けられて、四邊は炊煙棚引く人里と化して了つたのであります。其の勢力の凄じい事には誰しも舌を巻いて

驚かすには居られません。

行基が到る處に於いて斯くの如く萬民の渴仰を受けたといふのも、畢竟は高德の致す所に相違御座いませませんが、更に卻いて考へて見まするに、行基の説教即ち佛教の説き方が餘程巧妙であつて天下萬民の耳に這入り易く、彼れの法話を聽いた者が悉く

「成程々々有り難いもので御座る。」

と能く合點が行つてごうしても信仰せずには居られないやうに仕向けた事が一ツの原因であつたに相違無いと考へられるのであります。果せる哉、彼れ行基は

「隨器誘導」

といふことを申して居ります。此れは

「器に随つて誘導す」

といふ意味で、器は

「うつは」

即ち人物人柄を指して居ります。廣い世間には色々な人物が入り交つて居ますから、其の中には能く物の道理を辨へた者も居りませうし、又無學文盲の輩も澤山に居る筈で御座います。従つて世間一般の者に佛の道を説くに致しても誰にも彼にも一様に千遍一律な導き方をしたのでは到底十分に徹底する事は望めませんから、大なる人物には大人物のやうに。小なる人物には小人物のやうに、又智慧の有る者には智慧の有る者のやうに、智慧の無い者には智慧の無い者のやうに、夫々其の人柄を斟酌考量して、手を代へ品を替へて誘導

して遣るといふ事が行基布教の秘訣であつたので御座います。前に述べた孔子の答へ方といひ。且又行基の所謂

「隨器誘導」

といひ、何れも千古に互るべき卓見であります。相手の如何なる程度の者であるかを能く辨へて口を利くと云ふ事は實に話術の眞髓であらうと思ひます。私共が他人の面前に起つて話を致しますに就いても右の心得が第一に肝要で御座います。聽衆が幼稚な者なら桃太郎や花咲爺や猿蟹合戦の如きお伽話が適當しませうが、散々浮世の荒波に揉れくつて、人生の辛酸を嘗め盡した老人達には却つて後生を善くするやうな抹香臭い話が喜ばれるであります。人間と申す者は、年齢や地位や職業等に由つて、夫々趣味が違ふもので御座い

ますから、青年には青年に向くやうな、労働者には労働者に向くやうな話の種を撰ばなければならぬものであります。斯くすることが行基菩薩の所謂

「隨器誘導」

の趣意に適ふので御座います。

話の筋は假へ立派な事柄であるにしても、對手に何の縁もない全く無關係な話材であります。聞いて居ても頭の中で薩張り受附けて呉れないから一向面白く無い、恰も馬の耳へ念佛を唱へると同じ事で少しも利目が有りません。元來他人の話をして成程と感心する原因を尋ねて見ますと、話の節々に何物か自分に思ひ當る所がある爲めであります。幾分か自分の心の内に覚えのある事を話される

から、

「ハハア彼れだナ。」

と思つて耳を傾けて話を聴かうといふ氣持になるので御座います。話を聴いて居ながらも、始終、前以て自分の心の中に貯へてある事柄と引き着けて居るから話の趣意が解つて面白いと感ずるのであります。之れに反して、對手の頭の中に些も覚えの無い全く無關係の事柄を突然話し掛けましても解る筈が無いのですから、對手に

「彼の話なら一つ聞いて見よう。」

と思はせるのには、是非幾分か對手に覚えの有る事柄を材料として話さなければならぬ。此所が即ち

「隨器誘導」

が必要であるといふ根本の理由であります。
 流石に現今の小學校の教授法は右に述べました所の心理學上の基礎の上に立つて居ります。小學校の教師が修身なり國語なり算術なり乃至は地理歴史なり何れの學科を教へるにしても、新しい事柄を突然兒童の前へ持ち出して不意討を喰らはすやうな事は致しません。必ずや、先づ前に授けた箇所を復習したり、或は既に知つて居る事柄を問答して、今將さに教授しようとする事項の素地を兒童の頭の中に喚び起させて置きます。故に此の一時間の課業は前一時間の授業の上に附加へられて居るもので、恰も煉瓦を積み上げるやうな仕事であります。今日の仕事は昨日の仕事の上へ積み重ねて行くもので、今年の事業は昨年の上へ更に積み重ねて行くもので御座います。

す。斯うして、新しい事柄を舊い事柄の上へ附け加へ、其の上へくと段々に一層新しい事柄を添へて行くので、今日新しいと思つた事が奚んぞ知らん明日は既に舊い事柄となつて了つて、更に其の上へ尙新しい事柄を積み上げられて行くものですから、該の教授を受けた兒童は日に月に智識見解を廣めて行くのであります。遂ひ口が立つて餘談を申し上げて誠に相濟まざる次第で御座いますが、兎にも角にも、全く心の中に覺えの無い事柄即ち全く自分と交渉の無い事柄は、如何程汗を流して話しても効驗の無いといふこと、言を換へて申せば、聽衆の頭相當な話をして、而も此方の思ふ壺に落ちさせると云ふ事が話術の最大秘訣であるといふ事をよく御承知を願ひ度いのであります。

語るべき對手に適當した材料を撰擇するといふ事に就いて、私が此の頃讀みました一休一代記に餘程参考になる話が御座いますから、二ツ三ツ申し述べて見ようと思ひます。御承知の通り、京都紫野大徳寺新樹庵の一休禪師と云へば王侯貴人を爪の垢ほどにも思はず、而して又釋迦達磨をも土塊の如くに見て居た位に悟を開いた大名僧でありましたが、此の一休禪師が何時も對手に適當した痛切な法の説き方を致して居ります。

○一休禪師將軍の度膽を抜く。

三代義滿公といふは足利代々の將軍中で最も驕奢全盛を極めた人であります。此の義滿公が、桃の節句に、東山の大御殿へ諸大名を招いて酒宴を開かれた折の事ですが、不圖、其の年の正月元日に新樹庵の一休が獨體を振り廻して、御用心御用心

と叫びながら都大路を彷徨き歩いたと云ふことを思ひ出して、其の噂を諸大名へ話された。其れが切つ掛けて一休の噂に花が咲きました。何が扱、我儘者の義滿公の事ですから、早速板倉内膳太夫を使者として大徳寺へ遣し一休を召し出すことになりました。其所で、一休は師の養叟禪師に連れられまして、臍の緒切つて始めて將軍の御所へ出て、案内に伴れられて御殿へ通りますと、正面の一段高い所には將軍義滿公が着座、其の左右には畠山國氏石堂頼房千葉氏種吉良滿義山名師氏桃井直常細川頼明仁木重代一色秋教などいふ歴々の大名が、何れも今日を晴れと大紋風折烏帽子を着け、綺羅星の如くズラリと居並んで、一休が此の席に於て如何なる事を申すであらうか、片唾を呑んで昵と様子を見て居ります。大抵の者ならば先づ臆じけて了ふ所ですが、流石は一休、將軍などは眼中に無いから、平氣の平左で、スーツと進んで、將軍の席から一疊許り隔てた所へピタリと着座して、徐かに頭を下げました。列座の大名方は先づ以て此の大膽な動作に舌を巻いて驚いたのであります。

一應の挨拶が終りますと、

義「一休とやら、其方へ尋ねるが、彼の庭前の松は曲がつて居ると思ふか、夫れとも真直であるか、如何ぢや。」

二「左様で御座いますな。丁度は是れに居並んで居ります大名と同じ事かと存じます。」

義「ハハア、成程。大名と松と同様であるか。」

二「左様で御座います。」

義「其れは又如何なる理由であるか。」

二「然ればで御座る。庭前の松を斯うして見ますると、何れも曲り彎つて居りまして、真直な松は一本も御座いません。是れと同じで、茲に列座の諸大名は、表面は誠に立派に見えますが、腹の中では一寸も早く祿を増して貰ひ度い、位を登せて家門の榮華を圖り度い、と考へて居るので御座いますから、列座の大名方の志と庭前の松の幹とは丁度同様であると申したので御座います。」

義「ウム左様か、予も亦松の曲つて居る事を能く存じて居るぞ。」

と言ひながら、諸大名の顔をシロリと睨みました。

○一休禪師と蓮如上人との和歌問答

或日の事、一休禪師が極く粗末な袈裟法衣に蓑草履を穿いて、お供も連れず、ブラリと大谷本願寺に参りまして、碌々案内も乞はずに、ズーツと本堂へ通つて、蓮如上人に面會を致し、色々物語をした後で、一休禪師が筆を採つて

蓮葉の濁りに染まぬ露の身は、只其儘に真如實相。

と認めて差し出しますと、蓮如上人は嫣然笑つて

佛として外に求むる心こそ、迷の中の迷なりけり。

と答へた。

二「イヤ大きにお邪魔致した。是れで今日は歸りませう。」

蓮「ハハア、今歸ると仰ツしやつたが、何所へ歸られるか。」

「思ふに任せ、風に連れて。」

蓮「然らば風なき時は。」

禪師「イキナリ轉りと横になつてアカンベイをして

「風なき時は是れだよ。天地は絶えず運動して一刻も休む事なし、動くは風、降るは

雨、息が通はねば死す、人は氣に住み、魚は水に棲む。」

蓮「如上人ハタと膝を打つて

蓮「風なき時は寝轉んでアカンベイとは恐れ入つた。」

○輕口問答

當時、京都の社寺奉行を勤めて居た蛭川新左衛門と云ふは文武兩道に達したる所の立派な武士でありました。此の人は頗る俗離れのした性質で深く一休禪師に歸依して居りました。或日の事、新左衛門が、何か極く面白い質問をして禪師を感心させたものと、種々の事を考へながら大徳寺を訪れました。

其の日は、折好く禪師が寺に居りましたので、早速奥書院へ通されて、弟子共の勤める儘に絹布の座布團に悠然と坐りまして、

禪師様、過日は圖らず種々と教へを頂きまして有り難う存じます。今日は又重ねてお諭しを願ひ度くて御邪魔に伺ひまして御座ります。」

二「フム左様か。……能うこそお越であつた。先づ打ち寛いて緩々遊んで行かれよ。」

新「有り難う存じます。エ、早速ながら少々お伺ひ申しますが、此の人間といふ者は全體死んでから如何なる者に爲りませうかな。」

と問はれて、一休はニコ／＼と顔に笑を浮かべながら

二「左様どうも種々な物になるな。何に爲ると定まつては居らん。」

新「ハハア、禪師様は面白い事を仰つしやいますな、して見ると佛には爲らぬもので御座りますか。」

一「と新左衛門は如何にも不審に堪へ無いやうな面持をして居りますから。」

「合點がゆかぬか。然らば其の證據を見せて遣はさう。コレ／＼鐵梅は居らぬか、奉納帳を此所へ持て。」

お弟子の鐵梅は臺所から奉納帳を持つて来て、禪師へ差し出しました。

「新左衛門殿。サ、之れを見ると悉く解るよ。人が死ぬとな、随分種々な物になる。

エ、と、先づ米屋の七兵衛は湯葉五把になつた。其れから、近江屋の作左衛門が岐阜豆腐三十挺になつた。其れから又、梅屋喜作は椎茸十袋になつた。斯う云ふ工合で十人十色。各自勝手な物になつて居るが、畢竟は皆寺の茶の子に爲つて了ふのぢや。

禪師の答は随分馬鹿氣切つたことで、鳥渡聞くと熱病患者の囈言のやうであるが能く／＼考へて見ると、死んだ後は何に爲るだらうかなど、思ふのが既に迷ひである。此の理を悟つた新左衛門、流石は一体禪師偉い方であると感心して

「新成る程、悉く合點がまゐりまして御座ります。恐れ入りました。」

これは未だ蝮川新左衛門が禪道に心を入れ始めの頃でありましたが其の後常に禪師に就いて修業を致し、段々佛學に達しまするに従つて、禪師の教へ方諭し方も大分模様が變つて來ます。後に悟道堅固の新左衛門も定業限りありて愈々玉の緒の今將さに切れんとした時に、一休禪師は新左衛門の枕邊へズカ／＼と進まれた。すると、新左衛門は聲を一際張り上げて、

「新し生れぬれば其曉に死ぬるなり今日の夕は秋風ぞ吹く」

「ア、新左衛門、能く讀んだ、只今より彌陀の淨土へ案内して遣すぞ。」

「一人來て一人で歸る我なれば、道教へんといふぞおかしき。」

「アハ、新左衛門、流石に慥ちやな。……」

「一人來て一人で行くも迷なり、來らず去らぬ道を教へん。」

「新ハッ勿體なき御引導誠に有り難く御請を致しまする。」

と最早心に懸る雲も無く、笑ふが如くにして其の儘新左衛門は年七十一歳にして此の世を去りました。此の事を聞及んだ者は何れも一休禪師の引導といひ、新左衛門の覺悟といひ、揃ひも揃つて實に天晴なものだと言つて褒めない者は御座いませんでした。

右に掲げました通りで、同じく法を説き同じく道を諭すに致しましても、對手次第で説き方諭し方が種々と異なつて居ります。義満の如き人には將軍相當な説き方をして、當時南北兩朝軋轢の餘燼が未だ全く冷え切らず、將軍幕下の諸大名ですら自己の利益ばかりを謀つて居るといふ極めて危険な時代で御座いましたから、將軍と雖大いに身を慎んで十分に徳政を布く事が肝心で御座る、と云ふ意味を庭前の松に託けて諭して居ります。又蓮如上人の如き佛門の大家に

對しては、又其れ相當の取扱ひを致して居りまするし、而して又蜷川新左衛門のやうな武士には、是れ亦最も適切な説き方をして十分に會得の行くべき方便を取つて居ります。大分話が横道へ這入つて管々しい述べ方を致しました事は如何にも恐縮に存しますが、畢竟は語るべき對手に適當した材料を撰擇して自分の話が聴衆へ徹底するやうに心懸くべきことであるといふ話術上の必要條件をお話し申したに過ぎ無いのであります。話者自ら眞に感じたる材料を撰擇すること。元來話と云ふものは、唯口頭ばかりで天麩羅を食べた時のやうにペラ／＼と澁滞なく喋舌つても、或は又立てた板に水を流した如く滔々懸河の辯を振つても、聽いた後で對手の頭の中に何等の痕跡をも

遺さないやうでは、該の話に毫も價値が無いのみならず、聴衆の側から云へば、誠に迷惑至極な次第で御座います。故に苟も話をするからには、是非聴衆の心中に強く深いところの感銘を與へることを期して掛らなければならぬものであると思ひます。

聴衆に強い感銘を與へようとするには、如何なる話材を撰擇するところが肝心でありませうか、即ち話者自ら眞に感じた話材を撰擇することが其れに對する最善の方法で御座います。繰り返して申すならば、話者自身が先づ自ら眞に悲み眞に嬉しい面白いと感じた材料を撰擇することが最大要件で有ると申すので御座います。若し話者自身すらも何等の感じが無い位の材料でありますならば其れを話して到底聴衆を感ぜしむる事の不可能なるは當然の道理であります。從

つて話をしようと思ふ材料に關しては、話者は十分豊富な智識を有して居らねばならぬ事も全く自明の理で御座います。何故かと云へば、話者自身ですら能くも解つて居ない材料をどれ程苦んで話して見た所が、聴衆には尙更何の事やらサツパリ解らぬ事になつて了ふからであります。

彼の講談師の如き藝術家は、此の點に就いては中々普通の人には測り知ることの出來ぬ程慘憺たる苦心を致して居るものと見えます。

尤、凡ての講談師が左様であるとは言ひ切れませんが、少くとも今日世間から第一流と認められて居る者の中には此の苦心努力を惜まない者があるので御座います。例へば、佐渡の鑛山に關係した話をする爲めには、態々遙々と佐渡島へ渡つて金鑛採掘の實際の状況を

見たり、掛りの役人に就いて今昔の變遷を尋ねたり、鑛夫となつて斯る所へ流れ込む者が如何なる手段如何なる経路を取つて來た者であるかまでも探り、尙鑛夫町に於ける鑛夫の日常生活の狀態を目撃したり、更に佐渡と最親密なる地理上の關係を有する所の新潟港市中の實況までも事細かに實地踏査をして來るので御座います。昔ならば

來いとゆたごて行かりよか佐渡へ、

佐渡は四十九里浪の上。

と謠はれる程だけあつて、容易には行く氣にはなれなかつたもの、文明の利器を用ひ、交通機關の發達した今日と雖も、未だく／＼チヨツクラ行つて見ようといふ氣にはなり難いものです。然るに、自家

藝術の爲めなればこそ、身を越佐汽船會社の船に托して彼の島へ渡るので御座います。自分の業に忠實なる一點は誠に感心なものではありませんか。

右の如く、自身で十分に調査研究して豊富な材料を貯へて、さて演壇に登つて話を致しますならば、該の話は實に生きて居るものでありますから、縦へ音聲の使ひ方や身振り等の枝葉に多少の批難がありましたも、該の話の根底が眞實でありますが爲めに、之れを聴かされる對手は自然に動かされ釣り込まれて、遂に強い感銘を與へられるやうになるので御座います。

さて、此所までお話を進めて參りますと、勢ひ

「話者の人格」

と云ふ事に就いて申し述べねばなりません。前に緒言の所で人格と言葉とは相一致するものであると申し置きましたが、實に其の通りで、偉大なる人格を透して發せられた言語は、片言と雖も、活きた生命を持つて居ります。而して、何百年何千年の後までも世人が敬慕して惜かざるものとなるのです。高い人格より發せられた言葉は人を感化する力を持つて居るからであります。然らば其の高い人格の統一點は何であらうかと申しますならば勿論至誠であります。

「至誠人を動かす」

といふ言葉は右の理由を十分に説明して居るので御座います。ごれ程巧妙な言辭を駢べ立てました所で、其の人の人格に缺點があり、

至誠の含まれて居ない言葉であるならば、決して人を動かさし人を感ぜしむる事は出来ないであります。話術の箴言として

口で話さず、心で話す。

と申す語がありますのも畢竟、舌頭ばかりでペラ／＼喋舌らずに、本氣になつて、心の中から絞り出した至誠を以て話をせよとの意味であります。

文章に於ても亦全く同様で、唯筆先のみを技巧を弄して至誠の含まれざる文章は到底人を動すの力は有りません、之れに反して、修辭學上の立場から見ても左程の工夫考慮を費したものは認められぬ文章ながら、作者の至誠が文面に横溢して居る場合には、讀者は其れが爲に眞に感動せしめられるもので御座います。

例へば

○中江藤樹の書置

我等老母一人。江州に罷り有り候。母子相離れ候ては。養育心にまかせず候故文にて申し遣し候へば。返事に。婦人は境を越えずと申しこし。其の國を出づべき氣色なく候。親一人子一人の事に候へば。某を頼みたよりに致し罷在候處に。かやうに國を隔て。親を他國に捨て置き候事。道ならず存じ候ゆる。しきりに御暇の儀願ひ奉り候へども御宥免なければ力及ばず。只今立ち退き申候しかれば。不忠の者と思し召さるべく候へとも。つらく、忠と孝との二つをかけくらべ候に。君は碌を以て御招き候へば。我等如きの庸儒は。いかほども御家に集り申すべく候。さてまた老母は某に離れ候ては。他に頼むべきもの御座なく候。されば忠孝の二つをわきまへ見申すに孝は重くして忠は輕し。我義は重き方へ心ざし。輕きを捨て、立ち退き申すものなり。かやうに御家を出で、重ねて二君に仕ふべき心底これなく候。

此段聞し召しつけられずして。不届に思し召され候は、如何とも仰せつけらるべく候。すこしも御恨みに存じ奉らず候。道の重きにひかされ罷り出で候へば。かりそめに御厚恩を忘れ申し候に似たれども。天命の至極においては。愚夫の了簡の上およびがたく。かくの如くに御座候以上。

の一文の如きは確に至誠人を動かすの適切なる例證であります。

「親一人子一人の事に候へば……親を他國に捨て置き候事道ならず候ゆる……只今立ち退き申候」

といふ邊りは到底平氣で讀み過すことは出来ません。どうやら薄暗い行燈の前で靜かに筆を運ばせつゝ、凝つゝ思案に暮れた孝心深い藤樹先生の面影が、チラ／＼眼前に見えるかの感じが致してなりません。斯く申す私は、平生何かの機會がありますと、近江聖人の幼

年時代即ち藤太郎と申された時分の話をするのが好きで御座います。自分でも可笑しい程此の話には凝つて居るのであります。夫れや此れやが手傳ふ爲めか、右の書置を讀んで一層感に打たれるので御座います。

「天命の至極においては愚夫の了簡の上およびがたく……。」

の一節は藤樹先生の本心を吐露されたもので、先生の眞面目が遺憾なく現はれて居るものであらうご考へます。序を以て實の所を白状致しますならば、私は此の一文を透して藤樹先生の精神を微かに窺ひ知るのであります。自分の窃に得意とする所の藤太郎の話をするに方つても、藤樹先生が此の氣性であるからには藤太郎も彼の時には屹度斯う言つたに違ひ無い、又祖父の家

を出奔してから、道中に於てこんな風な事をした筈である、ごいふが如く、自分勝手な想像までも附け加へて、話に修飾を添へる場合が尠くないので御座います。又々調子がつき過ぎて、遂に自分の話の種明しのやうな事まで述べて了まして誠に恐れ入りますが、兎も角、至誠が人を動かすものである、といふ一點は何卒お承認を願ひ度いのであります。

至誠と云ふ事に關係して。もう一ツ私が實際に出遭はした經驗談を例に引くことを許して頂きます。其れは、忘れもしない大正二年二月十九日最夜中の出来事で、彼の神田の大火の一件で御座います。當時、私は神田區中猿樂町に住居致してをりました。而も、その前々夜の事、道一筋を隔てた北神保町に火事がありました。私の最親

密なる友人は不幸にして類焼の厄に罹り、該の家族一同は狭い私の家に避難して居りましたから及ばずながらも何や彼やと力添へを致しました。漸く友人の家族は本郷區に住む事となりまして、十九日の夜も更けた十一時過ぎる頃に私の家を去られたのであります。所が、斯くあるべしとは神ならぬ身の知る術もなかつたが、友人が出て行かれてから僅た三十分許を経て、私の家も亦祝融氏に見舞はれて、瞬く間に無慘にも灰燼に歸して了つたのであります。然るに私の妻は前年の暮以來薬餌に親んで居りまして未だ十分脚腰も立たなかつた上に、幼児四人の足手纏いがありました。

「スワ火事よ。」

と近所の人がか叫んだ聲に愕いてソレツと立ち上つて見ましたら、火

は正しく三崎町救世軍大學の方面で、折からの太風に煽られて盛んに焔を吐いて居るのであります。此の時始めて経験しましたが、愈々焼ける火事になりますと意外に四邊は森として凄いもので御座います。人間ご云ふ者はイザご本氣になつた刹那には音聲が出ないものご見えます、其所で、私の家族は前に述べました通りの有様です。家財道具の類は悉く焼き棄てる覺悟を定めて、唯病める妻や幼き子供等に怪我さへ無ければ望外の僥倖であるご考へまして、無言の儘、彼等を完全な場所へ連れて行くべき思案を廻らして居りました。有り難い事には、親しい友人や數年前の教へ子達が早速駆け付けて下さいまして、其のお蔭で家族全體無事に避難することが出来ました。殊に、私の一生涯を通して身に餘る光榮と思ひます

ここは、小原區長殿の御子息達から容易ならぬ御厚情を蒙りました
事で御座います。斯うして避難して居ります内に、一通の書状が郵
便脚夫から私の手に渡されました。取る手遅しご封を披いて讀み下
しますと、左の通りの文面でありました。

罪を天下に謝す

(神田の大火に就て)

救世軍本營 山室軍平

此度神田の大火に就き其發火の場所が救世軍大學殖民館であつたのは眞に心苦し
い事の至りである私は此事に關し何んと天下に申開きをなすべきかを知らぬのであ
る
發火の原因に就ては私共が只今迄取調べた限りでは、火はどうしても殖民館の外部
から出たものにて決して内部からではなかつたものと信じて居る併し乍ら其れ等の

事は其筋の取調が追々進捗すれば萬事明白になることであらう。其結果が救世軍に
利であらうと不利であらうとは問ふ所でない、私共は唯正直なる事實の前に頭を垂
れ、謹んで其一切の罪に服することを覺悟して居るものである。發火の原因は如何
にもあれ、殖民館が先づ火になつて、然る後近隣に飛火し終にあれ程の大事に至つ
た事に就ては、私は其責任者として何と申開の致様もないのである。平生假りに
も救世済民を以て志とする者でありながら、今は斯くして却つて多數の市民に非
常な迷惑を及ぼす如き事になつたといふは、どういふ心外千萬の事であるか。私は
今や全く自分の立場を失ふた如くに感するのである。

私は如何にして此大なる罪を天下に謝し、殊に此度の罹災者諸君に謝すべきかを
知らない。若し自分の病弱なる身體を投げ出して市朝に鞭たるゝことが、何んぞの
助になるものならば、私は喜んで然かせられんことを願ふものである。又は私が救
世軍に於ける現在の地位を擲つことが問題を解決する助となるものならば、私は喜

んで之を實行せんことを願ふものである。さり乍ら若し幸にして天下の同胞と、殊に多數の罹災者各位が尙も私の此重々の不行届を赦し、今暫く此儘に置いて下さることが出来るものとすれば、私は今改めて諸君に誓ひ、僭越なる引事ではあれど、どうか願くば彼の聯隊旗を失はれた後の乃木大將の事を鑑み最早此上は全く自分を一箇の死んだ骸と見做し、以來一刻でも寸時でも、生きて居る限りは、全く唯自分の此度の罪を償ひ、何か身に應ずる善事を行ふ爲の外は、何んの望みもない者として、生き存へることを許して載きたいと願ふのである、重ねて天下の同胞殊に此度の罹災者各位に對し低頭平身して自分の重々の不行届に關する寛容を切に懇請するものである。

之れを讀む人の境遇に依つて感じ方が餘程違ひませうが、我共のやうに當時焼け出されて、辛つと避難所で夜を明かした者の手許へ突然渡されて此の文を讀み下した際には一種何ともいひ表し難い感に

打たれたので御座います。救世軍あるものが、平素弱者救済の爲に實に麗しい努力をして居る事も、不幸な者に同情して、倫落の底から救ひ出すといふやうな立派な慈善事業を行つて居ることも、十分承知しては居るものゝ、扱實際眼の前に罹災の慘狀が横はつて見ると、其所は人情の弱點で、自然火の出た元が幾分恨めしいやうな氣持になる、然るに、斯うして救世軍の山室氏から兎も角も誠意を罩めた謝罪状を受取つて見ると、此れが又妙なもので、嗟回つて來た運だから致方が無いと諦める氣にもなるのです。

熟々此の謝罪文を讀んで見るのに、流石に我國に於ける救世軍の主宰者たる山室氏の苦心と誠意とが現はれて居ると思ふのでありま

す。殊に口語體を選んだ一事は最時宜に適して居ります、自己の誠意誠心を披瀝する爲には自分の思ふ儘の事が現はし得なければならぬのですが、之れを文語體に致しますると、熟練家にあらざる限りは動ともすれば文字の末に拘束せられて、ごうも思ふ存分の事が書き難いもので御座います。

此の文は、先づ三段に分れて居つて、第二段には潔よく罪に服するといふ覺悟を告白して居ります。若し酸だの昆蕪だのと云つて、言を左右に託し、管々しい辨解でもするならば却つて罹災者の感情を損ねたに相違無いのです。所が、

「利共は唯正直なる事實の前に首を垂れ、謹んで其一切の罪に服することを覺悟して居るものである」

ごキツバリ言ひ切つてあるから、私共は彼の誠意を認めざるを得ないのであります。而して

「平生假りにも救世済民を以て志とする者でありながら、今は斯くして却つて多数の市民に非常なる迷惑を及ぼす……どういふ心外千萬の事であるか。私は今や全く自分の立場を失ふた如くに感ずるのである。」

ご言はれた所は、類焼者の私から見ても、實に山室氏の心中が氣の毒でならない、

「事志と違ふ」

とは正に此の事で御座いませう、斯う言はれて見ると、怒るにも怒られず、却つて氏の心事に同情するのであります。此の邊もやがて至誠人を動かすの例となりませうかと思ひます。

第三段は、主として償罪の方法を述べたもの、其方法に副と主とあります。山室氏の志は無論後者即ち主たる方法にあるのですが、既に潔よく罪に服した以上は、自分の本旨を前に述べる事が甚非禮であるから故意と副の方法を前に述べてあります、則ち

「病弱なる身體を鞭たるゝこと」

「現在の地位を擲つこと」

を擧げて居ります。私は山室氏の人格を信するが故に、此の言が決して其の時相場の語でなく、實際氏が本心を赤裸々に些の修飾も無く述べたものと信じます。次に、愈々主なる方法を述べて居る。時恰も故乃木將軍を渴仰する念が私共の頭の中を頻りに往來して居た時分であつたから早速それを引事にしたのは誠に如才の無い仕方

あるが、又竊かに氏の抱負が頗る小でないことが窺ひ知れるのであります。縦へ身體は病弱な見る蔭もない者であつても、罹災者の意氣に感ずる以上は是れ丈の決心がある、と云ふ意味で

「最早此上は全く自分を一箇の死んだ骸と見做し、以來一刻でも寸時でも、生きて居る限りは、……何か身に應ずる善事を行ふ爲の外は、何んの望みもない者として、」

と述べてあります。

文章の巧拙とか文字の適不適とかに就いては、其道々の方々から御覽になつたら兎角の評もあらうかと存じますが、其邊の事は暫く措いて少くとも類焼者の一部には山室氏の誠意に動かされた者があるといふ一例として掲げた次第で御座います。

語るべき時に適當した材料を撰擇すること。

お目出度い祝宴の席上では不吉な話は成るべく避けるやうにするのが可いのも同様、凡て其の時と場合とを考へて適當な材料を撰べといふ事でありませう。對手がニコ／＼して機嫌の能い時は話のし易いものですが、對手がムシヤクシヤして焦慮れて居る時には餘程口の利き方に氣を付けませんと、それ程でも無い事が非常に對手の機嫌を損ずるもので御座います。某博士が某縣の教育會席上で乃木大將殉死の件を評して、今日の倫理學上の見地から考へて自殺其者には賛成する事が出来ないとかいふ意味の演説をされた時に、意外にも、聽衆全體の反感を惹き起して、ヤレ不謹慎の論議であるとか、ヤレ不信任を決議すべき者であるとか、凄じい騒ぎがあつたといふ

事ですが、私共が推測して見れば、博士の演説は學者の態度としては毫も差支ないものであつたのでせうが、何分にも當時は乃木大將を渴仰する念慮が世間一般の人の頭の中に漲つて居た時でありましたから、教育會員殊に兒童教育の重任を負ふ所の極めて正直なる教員諸君の頭脳には博士の演説が異様に響いて、思ひ懸けない物議を醸したものであらうと思はれます。私は此の噂を聞いた時に、日常辯論の大家として名聲の噴々たる博士にも似合はぬことをされたものかなと一圖に考へたのであります。果して此の時の噂が新聞紙や教育雜誌に見えた通りであるならば、それは全く語るべき時に不當な材料を撰ばれた罪なので御座います。弘法にも筆の誤りとは正に此の事を申したのでありませう。惜しい事に思ひます。

知名の大家でさへ、折々右の如く三寸の舌頭から思ひ設けぬ禍を招かれる事があるのも、其の原因はといへば、講演の筋は流石に立派なものに相違ないけれども、其の材料が其の時に相應しなかつた罪であることが多いやうに思はれるので御座います。大家でさへ時々失策がある位ですから、私などは餘程話るべき時といふことを見計つて話を致しませんと飛んだ災難を蒙ることが有らうと思ふのであります。

私が今でも覚えて居る事ですが、明治廿七八年戦役當時、旅順攻圍軍が血を流し屍を積んで苦心慘憺たる最中の事、一般世人は

「旅順も愈々今夜は落るせ。然うでなければ明日は屹度陥落だ。日本の軍人は強いからナ。」

と言つて、誰しも號外を待ち焦れて居たのに、若し物好きな人があつて

「ソリヤ駄目だ。日本人も強いだらうが露西亞人だつて體は大きいし腕力はあるし組打と来れば先づ彼方のものだ。さう君の言ふやうに容易く落るものかヨ」

など、云つて澄して居ようものなら、夫れこそ大變、直ぐに露探と間違へられて拳骨の雨が降つて来ようといふ始末でありました。斯んな時には、矢張り日本軍人が勇敢であつて、而も君と國との爲には生命を鴻毛の輕きに比し、死ぬことを何んとも思はないといふことを極力褒めて居るのが其の時に適當して居りますし、又實際其の方が我國の爲にも吾々の爲にもなるのであります。國家の大事に方つては、國民の意氣を少しでも銷沈させるやうな言動は全く禁物

であります。成るべく士氣を鼓舞する方便を取らねばならぬのであります。

次には又、四季折々に相應した材料を撰ぶといふ事も必要な注意であります。例へば春ならば花に關係ある話、夏ならば螢、秋ならば月、冬ならば雪、といふやうに、夫々に關係を持つた材料を撰んで話を致すことも有効な方法で御座います。雪とか花とか申しまして、理科博物の話に限つた譯ではありません、其等のものから聯想することの出来るものを廣く含めて申しますので御座います。例へば花——吉野山——南朝の忠臣——武士……又雪——櫻田の變——四十七士……と云つたやうなものであります。更に又何か吾々が記念すべき日とか、歴史上で著しい事件のあつた日とか、名高い人物の死

んだ日ごかいふやうな時に、夫々に適當した話をするならば一層聽者の印象を深くする事が出来ます。今日、小學校で教育勅語戊申詔書御下賜の當日に嚴肅な捧讀式を擧げて、勅語詔書の御趣意に相當した訓話をなしつつ、あるも自然に此の語るべき時に適當した材料を撰んだ事になつて居ります。學校に依つては、毎年十二月十四日正しくは陰曆でせうが)に必ず全校の生徒を引き連れて高輪の泉岳寺へ校外教授に行かれる事にあつて居ります。

總じて現在の社會には時折の流行といふものがあります。或時は元祿々々云つて髪飾りから衣服調度の類までも是非元祿風でなければならぬやうに世間一般が心得て居る時もありますし、或時は女權擴張問題とか新しい女とかいふ事に熱狂して居る事もありますし、

又或時は日米問題に猫も杓子も口を尖して居る事もありますから、其の時其の折に人氣の向つて居る事柄を能く察して、それに相應した話の材料を撰擇する事も亦大に肝心で御座います。

序でに、私が實地話して見た材料の一つを左へ述べて御参考に供する事に致しませう。

此の話をするのに最適した時であると思ふのは、

- 一、三月雛節句
- 二、昨夜から降り続いた雪の積つた今朝。
- 三、外國交通(開國)に關した考が聽衆の頭に往來して居る時、殊に井伊掃部が國難に犠牲となつた事を知らせようとする時。
- 四、横濱(野毛山)の銅像を観た時。
- 五、千住回向院に關係した話のあつた時。

六、志士といふ者の訓話の序がある時。

などでありませうか。

此の話の趣向は、同志の一人稲田重藏正辰の妻たかと云ふ者が一子己之松を背負つて、櫻田門附近に隠れながら變事の始終を見届けて居た事實を基として、其の烈女たかが聽者に向つて當時目撃した實況を語る體に仕組んだのであります。其の方が一層感興を惹き易いと思ふからで御座います。

烈女たかの父は後に武田耕雲齋と稱した所の跡部彦九郎で、たかは當主跡部金一郎の姉で御座います。御承知の通り、跡部彦九郎と申す方は水戸の老臣で千五百石を頂戴致し郡奉行を勤めた頗る豪傑で御座います。然るに、稻田重藏の父は農でありましたが重藏が拔群の伎倆を認められて始めて郡吏に擧げられたから辛つと士の仲間入りが出来たのです。所が、縁は異なるもので、此の重藏が水戸藩中歴々の跡部家の娘に想はれて、而も身分の違ひが甚しいといふ彦九郎の意見も娘たかの耳に

は入らず、「重藏殿の外に妾の夫は御座りませぬと散々に駄々を捏ねた擧句の果が、
 「然らば勝手にせよ。」と流石剛氣の彦九郎も手に餘して勘當同様に突ツ難したので
 御座います。されば、其の當時は水戸藩中でおたかさんの氣迷ぐれを嘲ける者も多
 ければ、重藏の艶富を窃に焼いて居る者も澤山あつたので御座います。夫れが、愈
 々櫻田の變事があつてから、始めて、重藏を見貫いたたか女の眼力は偉いものであ
 る、成る程跡部彦九郎の娘であつた、と云ふ事が解り、而して又重藏の母が又容易
 に得難い女丈夫で、丁度「とかく母に心ひかる、様子なれば。老心のひがみにや。
 斯く成り行き候まゝ、いよく心をかため。亡君の御爲に。命をすて給はるべく候。」
 と書置して自刃した原總右衛門の母と好一對であつたわい、と一時に世間から賞め
 囃されたので御座います。

櫻田門外血染の雪

皆さん、どうも珍らしい大雪で御座います、アア御覧なさい、屋根も、庭も、此の
 通り銀の砂を振り掛けたやうに眞白になりました。どうでせう、若し、此の綺麗な
 雪の上に、ポタリくと血が滲んで居たり、サツと刷毛で塗つたやうに血が透つ
 て此の雪を唐紅に染めて居たら、どんな氣持が致すでせうか。

今からザツと五十五年前の萬延元年三月三日の朝の事で御座いますが、妾は昨夜夫
 重藏から委細の事を聞いて居りましたから、今朝五ツ(今の午前八時)といふに、義
 母の死骸を鄭寧に荷造りして、「水戸藩跡部彦九郎方跡部金一郎殿」へ宛て差出して
 了ひましたし、又芝區宇田川町の住家の跡始末も手落なく済ませましたから、今は
 同志の健氣な働を見届けて、水戸へ注進の魁を致さうと思つて居るので御座い
 ます。幸ひ背負つた己之松も虫が知らすか常になく溫柔しくして居りますし、胴巻
 には、昨夜夫から渡された三百何十兩といふ大金が這入つて居りますから、道中の
 費用には些も懸念が無いので御座います。
 愈々櫻田門近くへ来て見ますと、今日は上己の節句で、早登城の大名もあるので御座

いますから、御門は最早開かれて居りました。濠端の所でヒヨイと顔を擧げて見ますと、同志の一人森五六郎様がお居になりましたから、ハツと思つたが素知らぬ振して行き過ぎまして、濠端を西の方へ参りますと、土手傳ひに同志の面々が散り／＼離れになつて、頻りに物待ち顔で御座いました。

妾は、尙も西の方へ井伊家の赤門の見えるまで進んで見ましたが、成る程薄々聞いて居りました通り、同志の方では天地人三段の備が立てられて、前の組には佐野竹之助、中の組には黒澤忠三郎、後の組には齋藤監物といふやうに、夫々部署が定められてあつたので御座います。夫重藏は、關様や廣木様と御一緒に中の組に居りましたのをチラと見て、誠に氣強い感が致しました。

聽て、彼方から下座觸の聲も嚴しく、總勢百名ばかりの行列が足早に押して來ました。スワと思ふと、胸も轟きました。豫ねて覺悟の上で御座いますから、騒ぐ心を無理に抑へて、道の彼方へ駆け寄つて密と體を隠しました。

待つ間程無く、行列が土手傍まで來たか、と思つた途端に、耳も劈けよと相圖の種が鳥が一發ズドンと鳴り響きました。扱はと目を睜つて居りますと、同志の面々は飛鳥の如くに斬込みました。すると渡邊善太と仰つしやる井伊家の劍客が振り冠つた太刀の下を掻き潜つて又一發、狂ひ達はすお駕籠を射貫いたのは森五六郎様、と、電の如くに福田のお老人が跳り込みざまグザと一突お駕籠へ鎗を入れた途端、渡邊に向脛を拂はれてバツタリ倒れたが氣丈の福田様は直ぐに起ち上つて、腰なる一刀抜く手も見せず、双手を掛けて再びお駕籠を刺し貫きました。福田様の電光石火のお働きと申したら、其れは／＼目醒ましいもので御座いました。

此の時、妾は思はず手に汗を握つたので御座います。すると、ワアツと喚き叫んで當るを幸ひ蹴倒し斬り散し、血汐を浴びてお駕籠側へ來た者がありました。見ると同志の中でも勇士と呼ばれた有村様が御座いました。陸尺共も一所懸命、お駕籠を門内へ擔ぎ込まうと致しますのを、有村様が後から追ひ縋つて陸尺の脛を拂ひまし

たから、お駕籠はドツと横に倒れました。
妾は生れてから此の時位ヒヤ／＼した事は御座いません。萬一お駕籠が門内へ擔ぎ込まれたなら、掃部頭のお首級は同志の手に擧げることには出来なかつたので御座います。
是れまで、始終お駕籠側を守つて、同志の方々を苦しめた井伊方の劍客で河西と仰つしやる方は、遂々森五六郎様に討たれますし、同じ井伊方の日下部三郎左衛門と仰つしやる劍客は、有村様や大關様に圍まれて亦遂に倒されました。
すると、此の時早く、佐野竹之助様がツとお駕籠の中へ手を入れて掃部頭を引き出しますと、同志の面々寄つて集つて一太刀宛を掃部頭の體へ當てました。
同志の面々が喜び勇んで振り下ろす太刀がピュー／＼と風を切る時の凄じさといつたら何とも申し様が御座いませんでした。間も無くお首級を有村様の太刀でスポリと刎ねられて刀尖に貫かれました。

妾は最早始終を見届けましたから、宙を飛ぶやうにして江戸橋から堀江町へまわり早駕籠を雇つて千住へ急がせましたが、千住で又駕籠を替へて松戸へ辿り著き、水戸の生家へ到着したのが子の刻(今の午後十二時)過ぎで御座いました。
夫重藏は花々しく闘つて立派に本望を遂げましたし、妾は又水戸へ江戸表の大事件先頭第一の注進者として思ひ懸け無い面目を施したので御座います。
語るべき場所に適當した材料を撰擇すること。
同窓會とか、學生會とか、乃至は通俗教育の爲の催して學校内で話をする時、又は、軍隊の爲に兵營内で話をする時、或は又奇特的な家庭の望に由つて座敷でお話をする時、夫れから又、随分寄席や劇場で話をする場合もありますから、夫々の場所柄を能く辨へて其れに相當する話の種を撰ばなければなりません。

地方に由つては、土地の習慣やら、宗教の關係やら、産業上の事やら、又政黨に關した事など、種々斟酌することの必要な事情が存して居るものでありますから、成るべく是れ等の特殊な事情に適當した材料を撰ぶといふ事は頗る肝腎な方法で御座います。或る話をしながらチヨツトした譬を引くにも、其の土地其の地方の人々に極く親しい事柄を引合ひに出しますと、同じ事でも聽衆への感じさせ方が餘程強くなるのであります。

農業の盛んな地方で話をする時には、農業に關係した事柄を加味した材料を撰ぶのが最良い方法であります。養蠶織物業の發達した地方で話をするならば、養蠶や織物に緣故のある事柄を加味した材料を撰ぶのが最良い方法であります。多額に甘藷を産出する地方で話

をする時には、青木昆陽の逸話などが歓迎されると同様に、機業の發達した地方なら織物業に功績の著しい人物の苦心談などが最適當した材料であります。商業の盛んな地方なら商業上の道德談とか富豪に關した立志談のやうな材料も又適當したもので御座いませう

海岸地方であるならば航海業や漁業に關した事柄か或は又それに就いて著しい盡力をした人物の話などを加味して話すやうにしたら宜しからうと思ひます。

それから又、舊藩主に名高い人物があつて著しい事蹟でも有るならば是れも話の材料として適當であります。某政黨員が遊説に出懸けた時、丁度反對黨の地方で演説をしなければならぬ破目になつて頗る苦心をしたが、ドヤ／＼と詰めかけた反對黨の人々は、彼れが

何を言ふか、少しでも我黨に不利な口振りがあつたら、片端から混ぜ返して遣らう、と息を殺して待ち構へて居りますと、辯士はそんな事には委細構はずと云つた顔付で悠然と演壇に登りまして、咳一咳、徐ろに、舊藩主が極めて氣骨の稜々たる方であつた事を辭を盡して褒め湛へ、更に正義の爲には如何なる犠牲をも顧みざりし事を頻りに繰り返して、さて諸君の多くは該の舊藩主の家來であつたのであるから、斯かる藩主を嘗て領主に戴いた事の頗る名譽であると同時に、諸君は又、必ずや正義を採つて動かざる人達であると信じますと云つて、段々自分の本論に這入つて來たから、流石の反對黨も意外な想をして口あんぐり、豫ねて企んだ妨害も手の出しやうが無かつたと云ふ事でありませぬ。

其地方の宗教の事は餘程考へて話を斟酌するのが可いと思ひます。キリスト教の盛んな土地であるならば話の材料の中へ幾分かバイブルの意味を附け加へて置きますと大分受けが宜しいものです。又佛教の旺盛な土地でありますと是れも亦相當の注意が肝要で御座います。御承知の通り、佛教の中にも種々宗派があるものですから、其の邊の事も考へて見るのが宜しいのであります。どうも宗旨に凝つて居るといふ者は随分恐しいもので御座います。日蓮宗の信者と眞宗の信者は兎角仲が悪いものゝやうに聞いて居ります。日蓮宗で凝まつて居る地方では南無阿彌陀佛は話さぬ方が宜しいと思ひます。又、眞宗の信者の多い土地では南無妙法蓮華經の事は談らぬ方が宜しいと思ふのであります。

一休和尚が、眞宗と日蓮宗と兩方の信者の喧嘩を仲裁した時に、

南無を避け、四字と五字とが九字になり、一字の事で住持迷惑と書いたさうですが、成る程何方にも同じ南無といふ字が附いて、後は阿彌陀佛の四字と妙法蓮華經の五字との違ひで、畢竟は一字の事で宗旨争ひをする事になります。何方が負けても結局は釋迦の恥で、元を糺せば一ツものから出て居るのだから、頭から烟を立て、喧嘩しないでよさうなものです。ごうも此の宗旨に凝つた人の考は違ふもので御座います。

徳川八代の將軍吉宗公は非常に日蓮宗を信仰した方でありました。或る時御會式で名高い池上の本門寺へお成りの時に、何心なくヒヨイと本門寺の大門を見ますと、誰か悪戯をした物と見えて、柱の所へ南無阿彌陀佛と書いた紙切れが貼り付けてあ

りました。

吉宗公と云へば代々の將軍中でも一段優れた賢明な方でありましたが、宗旨の事は又別と見えて大層な立腹で御座いましたから、お供の者共も何んと申して宜しいか一向思案が浮んで来ないので弱り切つて居りますと、其の時の名奉行大岡越前守がスタノと足早に門へ近寄りざま、件の樂書をビリノッツと剝して、其の跡へ又別の紙を貼り付けました、それを吉宗公が見ますと
西方の主と頼む阿彌陀佛、今は法華の門番となる。
と書いてありましたから、吉宗公も思はず識らずニツコリ笑つて機嫌が直り、事無く本門寺の參詣を濟ませたと云ふ事です。

是れで先づ不十分ながらも話の材料を撰ぶ時にはどんな注意が入用であるかといふことを申し述べたので御座います。茲で、チヨツと附け加へて置き度いと思ひます事は

話題の撰び方

で御座います。餘り人の耳に聞き慣された平凡な話題を付けますと人の注意を惹くことが出来ません。材料の中味を考へて、成るべく奇抜な、而して、人の氣を付けさうな名前を撰ぶのが宜しいと思ひます。其れかご申して、餘り突飛を名前は却つて興を殺ぐ事がありますから、其の邊の事は手加減をしなければなりません。谷本博士が岡山縣でキリスト教に關する話をなされた時に

「大西博士の宗教を論ず。」

と云ふ題を撰ばれたさうですが、大西博士は同縣の出身ではあり、且又、キリスト信者でありましたから、大西博士の宗教は取りも直

さずキリスト教を意味することにもなり、其の上と同縣人の親しみの感もあり、旁々以至極適當な話題を撰ばれた事になるので御座います。其れから又、谷本博士はその著書の中に

「教育の目的を論ず。」

ごいふやうな意味の所へ、

「小學校令第一條を論ず。」

ご云ふ名前を用ひられて居りますが、小學校令第一條には小學校教育の目的が示されてあるのですから是れ亦最相當な話題の撰び方であるご申すことが出来ます。右のやうな機轉は私共が話題を撰ぶ時の大なる参考となるので御座います。最後に、話の材料は何所の庫から引き出して來るか、何所から見付

け出すかといふ事に就いて一言述べて見度いと思ひます。所が、話の材料は無限無盡で御座いまして、私共が日常目で見るとの耳で聞くもの手で觸るものが悉く話の種となるのであります。道を歩いて居ても、電車に乗つて居ても、或は汽車汽船で旅行しても、私共の眼が節穴で無い限りは、話の種が有り餘る程豊富に見出せるので御座いますから、少し氣を付けて居りますならば話の種は何程でも集める事が出来るのであります。

新聞紙は毎日新しい活きた話の材料を私共に提供して呉れます。雑誌も亦新しい種を與へて呉れます。學校の教科書は勿論のこと、歴史文學の書物などは最多く材料を差出して呉れます。稗史小説と雖も中々興味のある話の材料に富んで居ります。その他隨筆類は殆ん

ど全く話の種をギツシリ藏ひ込んである庫で御座います。詩歌俳諧寓話の類も話の材料とあるもの殊に譬喩として用ふのに最妙なもの特別な使ひ途があります。彼の禪學の書物などにも頗る面白い話の種が含まれて居ります。人物の話の種が入用ならば申すまでも無く夫々の傳記から材料を求めます。劇場や寄席や活動寫眞館へ行つて見ても話の材料は澤山に得られます。世間に有り觸れた講談物の中にも中々得易からざる所の良い話の材料があります。殊に此の類の物になりますと、話の種が見付かる許りで無く、發表の仕方までも參考することが出来る便利があります。毎々講談師が演ずる

「木村重成の堪忍。」

などの如きは小學校の國定修身書にも載せてある位なもので、講談

其の儘でも立派な話になりますし、又浪花節の

「神崎與五郎の東下り。」

の如きものは少し許り作り直せば美事な教育訓話となりますから、
「堪忍。」

の例話として教師が教場でお話しても恰好な材料であります。是れ等の事は餘り永くなりますから、後に折があつたら拙作をお目に懸けることにしまして此所では略します。

話 材 の 排 列

諸、愈々話材が前に申し述べた如くにして、之れが可いと定まりましたならば、今度は該の話をするのに、如何ある順序にするのが最

も宜しいか、此の點に篤と思案を凝らすべきで御座います。折角好い材料を捉へましても、其れを話す順序方法が巧くない時には、話の筋が散り／＼離れになつて、一向要領が聴衆に徹底しないことになつて了ひます。話の筋道が後になつたり前になつたり混雜致しますと、誠に聴き辛いもので、遂ひ話が解らず了ひになるもので御座います。夫れ故に、話の列べ方は話術の方で頗る大切な事になつて居ります。話の種が良い上に列べ方が上手に行きますと、夫れこそ鬼に金棒で御座います。

此所でも又、例の教授法の原則が非常に役立つのであります。原則と申しますのは、前にもお話し申した所の豫備提示連結總括といふ段階の事で御座います、此の段階をば、話の方でどう云ふ工合に用

ひたら宜しいか、私の考を述べて見ませう。

豫備

豫備は話の前置で御座います。結局は、聴衆の話を受取るのに都合の好い形になるやうにする爲の仕事であります。彼の講師達が話の始にはジツと落付いて重々しい口調を用ひたり、或は極く低い聲を使つたりしますのも、皆聴衆の方で耳を自分に借して呉れるやうにする爲の用意であります。薩摩琵琶の弾き始めも又其の通りで、ピン／＼ビュン／＼と暫くは聴衆の氣を森として落付くやうに致して居ります。義太夫の始めも多くは低く太くウーと唸つて居ります。是等は何れも豫備と申すべきもので御座います。

場所を踏み慣れた話術者といふものは演壇に登つて直ぐには口を開きません。先づ臍の邊に十分力を入れて度胸を定めて、出もしかい咳を故意と一ツ二ツして、ズーツと聴衆を見渡してから、徐ろに話を始めるもので御座います。丁度力士が土俵へ登つて念入りに仕切りをするやうなものであります。斯んな事をして故意と手間を取らせませぬのも、畢竟は、聴衆に話を待ち構へさせて十分聞き取つて貰はふといふ爲の方便で御座います。夫れならば、何時でも、始めは低い聲に限つたものかと云へば左様ではありません。

「私は是れから皆さんが御承知の何々の事に就いてお話を致します。」とか、

「諸君、諸君は日比谷公園に散策せらるゝ毎に、必ずや楠公の銅像を仰いで見らるゝ事でありませう。楠公が南朝の忠臣であつたことは誰しもよく知つて居る事でありませう。然るに、世間で云ふ所の楠公は多くは表面の楠公であります。私は裏面の楠公が未だ普く世人に知られて居ない事を残念に思ふので御座います。由つて、今日は其の裏面の楠公の事蹟に就いてお話致して見たいと考へます。」

とか申しますならば、是れも豫備の中に含まれます。斯う云へば聴衆は、

「ハハア、彼れだな、併し、裏面だとか何んとか頻りに断つて居るが、全體どんな話をするのだらうか、早く聞かせて呉れ、ばよいがナ。」

と此方の話を待ち受けるやうになるのであります。

夫れから又、講演者が演壇に立ちますと、聴衆は大抵拍手するもので御座います。此の拍手といふものは自然に豫備の働をなすも

のであります。バチ／＼バチツと行ると同時に話を待ち受ける構が出来ます、而して又、前々からの話で一時緩んだ聴衆の氣力が再び生氣を呼び起してピンと引き緊りまして、更に代つて演壇に起つた所の話者が是から述べようとする話にヒヨイと氣を向けて呉れるもので御座います。

聴衆に氣を向けさせるといふ事は最大切な話術上の秘訣で、是れが先づ話術の生命で御座いませう。此の事に就いては、尙次の注意の律動と申す標題の所で申し述べようと思ひます。

提 示

此所で愈々自分が話さうとする本文に這入るので御座いますが、話材の性質に由つて、本文の所を幾段にも分けて、一ツ一ツ定ま

りよく、キチン／＼と話を進めて行くのが宜いのであります。其の中にも、最も大切な主眼點は確かり捉へて逃さぬやうにしなればならぬ事は勿論で御座います。話の筋から云ふならば、眞の中身の生粹が此の提示の所で現れて来るのであるし、音聲の方から申せば、此所で最も力を入れて、張り上げて然るべき所、其の他身振りや態度の末々に至るまで十分に秘術を盡すべき所で御座います、聽衆が話を聞いた後で、何者か頭の中に残るものがあるならば、其の残つたものは、此所で話されねばならぬ筈であります。

木村重成の話ならば、

「克く堪忍したものだ、眞に強いといふのは此所である。」

と思はせるのは、全く此の段階に屬すべきもので、秀頼公の日常生活や大阪城内の模様や、諸侯登城の様子や、且又、重成の家庭の有様や、ギヤマン風呂の事や、渡邊内藏之助の友情などは寧ろ附け足しの事柄で御座います。

神崎與五郎の東下りにした所が、矢張り

「克く我慢した。大事の前には小事を犠牲にすべきものだナ。」

と思はせる所は全く此の段で御座います。

空前絶後の刀鍛冶五郎正宗の話にした所が、又彫刻の名人左甚五郎の逸話にした所が、何れも技術が神に入つて居た許りでは無く前者は孝行者としても優に後世の儀表となるべきもの、後者は又義理堅い事に於いて實に推奨するに足るべき人格を有して居たと

いふやうなことを、是非此の段階で談らねばならぬので御座います。

説明的の話ならば、愈々、

「此れは斯くあらねばならぬ。斯くあるべきものである。」

といふ眞味の所が説き明かされる段階でありますし、議論的話ならば、此所で自分の論旨のある所を提げ出して、本音を吐く場所で御座います。丁度、剣道の立合で、散々狙を付けて置いて愈々エイヤツと打ち込み斬り入る段取となつた譯であります。

話の中身の大部分は大抵此の段階に這入つて了ふもので、唯話の跡先少し許りが他の段階に属するので御座います。

私共が、他人の話を聞いた後で、聞いた人の寄々批評をして居る

のを聞きますと、折々

「どうも彼の人の話は前置が永過ぎる。」

「今の話は惜しい事に前置が永過ぎて、肝心な中味が乏しかった。」

とか言ひ合つて居りますが、是れ等は全く豫備に力を入れ過ぎて最も肝要な此の提示の段に力を注ぐことが不足した罪に歸すべきものであります。何んの話でも餘り豫備が永過ぎると締りが無くなつて間の抜けるもので御座います。鳥渡下女に用事をいひつけるのにも、

「端書を二枚買つて来てお呉れ。」

といへば、先づ用事の眞味だけを言つたこととなりますが、

「お梅や、御苦勞だが端書を二枚買つて来てお呉れ。」

では中身の上から申せば、少々豫備が加はつて居ります。

「御苦勞だが。」

と言はるれば

「ハハア、何かお使ひに行く用事だな。」

とお腹の中で點頭かれます。其れを又、法外に念を入れて、

「お梅や、一昨日もお使ひ、昨日もお使ひで疲れて居るのにネ、誠に御苦勞だが端

書を二枚買つて来てお呉れ。」

では、御鄭寧が過ぎて急場の用では間に合ひません。

右の如く申し上げますと、豫備の永いのはいかにも悪いやうに聞

えますが、話の模様次第で、前置が割合に永くなる場合が始終あ

るので御座います

連 結

此の段階では、是れまで段々話して來た事柄と似寄つた話を引合

に出して、其の似た點を一ツに結び付けるのであります。例へて

申すならば、彼の乃木大將が谷將軍から召されて急ぎ熊本城へ駈

け付けようとした途中、不幸にも植木の激戦で聯隊旗を奪はれて

以來は自分を死骸と諦めて了つて、殉死の當日までといふものは、

一にも二にも唯々陛下の御爲にのみ竭して居た其の芳しき精神と

楠正成が一身一家を犠牲にしてまでも偏に南朝の天子の御爲に盡

した忠義の心とを較べて見るやうにして、自分の話の主眼點を聽

者の頭の中へ確かり植る付けようといふ段取りで御座います。

前にも申し述べた事が御座いますが、人の心といふものには奇妙な

働がありまして、似た者同志を一纏にして覚えて居るものですか
ら、ポツンと一ツ獨り立つた事柄は、聴衆の頭の中に残らぬもの
で御座います。

總括

名前の通り、此所では、話の括りを付けるのであります。マア話
に由つて随分色々な事柄が有りますけれども、結局は、其の話の
中の主眼點に括りを付ける筈で御座います。大體に申せば

善い事をすれば善い報ひが来るが、悪い事は悪い結果に終るものである。

といふ風に括りを付ける場合が多からうと思ひます。

堅苦しい言葉で忠義とか孝行とか勤勉とか博愛とか云つて態々斷
はら無いでも、自然に話が其所へ落付けば宜しいので御座います

何れの話に致しましても、此の括りが巧く行かぬいと話の終りが
ポーツと煙のやうに茫然して了ひます。
文章を書くにしても、又話をするにしても、

「要領を得て居る。」

といふ事が肝心で御座います。能く急所を突いて居りますと、讀ん
でも聞いても解りが可いけれども、急所を外して居りますと、讀ん
でも聞いても誠に不得要領で解りが悪いもので御座います。其所で
十分に此の要領を立て、急所を突いて行かうとするには、先づ以て
話の列べ方を考へて見る事が必要でありますから、此所に教授法の
原則を持ち出して管々しく申し述べた次第であります。

右のやうに述べて參りますと、どうやら、一ツの話といふものは、

判然と三段階なり四段階なりにカツキリ區分があるかの如くに思はれますが、必ずしも左様では無いので御座います。前に話した事は今話して居る事から見れば自然豫備となつて居るが、今話して居る事は又是れから後の話の豫備となる理由で、一續きの話の中身は互に縫れ合ひ持ち合つて成り立つもので御座いますから、何所から何所までは必ず豫備である、彼所から此所までは誰が何んと言はふが提示で御座る、と言つて頑張る譯には行かぬのであります。

話といふものは唯面白く聽かせる許りが能ては無い、何か聽衆の頭へ入れよう、之れ丈の事は是非聽衆に感銘して貫ひ度い、と思ふ所の肝心な注文があるに相違ないのでありますから、其の點を目的にして話に締め括りを確り付けて置くが爲には、心理學の方から研究

して最良い話の順序が右に述べた段階を踏むことである、と云ふ意味になるので御座います。

柳生但馬守宗矩と云へば、天下に名高き劍道の達人で、柳生流を以て將軍へ師範を致した人で御座います。宗矩の長男を十兵衛三巖と申しまして、之れが又、父に似て素晴らしい俊傑で御座いました。

出し抜けに十兵衛の事を述べましたのでは、聽衆の氣乗りが薄いから、先づ落付いた低い聲で前置を話しますので、謂は、此れが豫備であります。

借、この十兵衛が幼少の折に劍道の極意を現して、流石の但馬守も舌を巻いて驚いたと云ふお話を致しませう。

これが提示の第一歩で、愈々十兵衛の話をするのであらうと知らせて

置いて、聴衆に話を待ち設けさせるのであります。

昔から梅檀は二葉より香しと申しますが、此の十兵衛が全く其の通りで、幼稚の時から既に文武兩道に達して居りました。三代將軍家光公は殊の外十兵衛を寵愛に成りまして始終お側に仕へて居りましたが、自分の屋敷に居ります時でも、十兵衛の心懸けは餘程他の子供とは違つて居たので御座います。

柳生家には、家來の者も、又召使の者も、多勢居りました。十兵衛は其等の家來や召使から若様と仰がれる身分でありますから、屋敷内の雑仕事などは手傳はんでも可い身の上で御座いましたが、朝は夙くから床を離れて、庭前の掃除をする事を自分の掛りと定めて居りました。父但馬守が目醒めてから椽側へ出て見ますと、何日も一庭が綺麗に掃き清められて、松葉一本でも散らばつて居たことはありません。其所で、但馬守が、掃除の跡を凝つと見て、心中に思ふやうにどうも十兵衛は感心な者だ、此の掃き方を見るのに、少しも油断が無い、我が子ながら天晴れな者だに

由つて、明朝は早く起きて窺つと掃除の様子を見届けて遣らう。

何事を見せても人間の賢愚が現はれるもので御座いますが、今但馬守が十兵衛の掃除の跡を見ますと、足の運び方から竹箒の使ひ方まで、悉く法に適つて居りまして寸分の隙も無かつたので御座います。

ソロ／＼本文に這入つて來ました。先づ、之れを本文の第一段と致します。學問の能く出来る程の者は、唯書物を讀むこと許りが上手なわけではなく、庭の掃除をさせて見ても斯くの通り念を入れて居るごいふ事を話し度いので御座います。

翌朝になりまして、但馬守は例よりもズツト早く起きて椽端へ出て見ますと、サア驚いた。庭の掃除はとつくに済んで、最早塵一ツも止めず綺麗に清められてありましたから、但馬守は「ハテナ、十兵衛は餘程夙く起きると見える。」と益々感心して次の朝は又、尙早く起きて見ましたが、其の時は庭の掃除が丁度済んだ所で御座い

ました。夫れから、但馬守は明日の朝こそ見届けようと思案をして、今度は未だ東の空も十分白まぬ内に起きて見ますと、椽端の雨戸が一枚だけ開けてありましたから、占たと心の中で思ひながら、忍び足で窺つと行つて見ましたら、今しも十兵衛は築山の彼方で、坊主頭のやうに刈り込んだ楠木の蔭を頻りに掃いて居る所でした。これが本文の第二段で、十兵衛の早起き勤勉といふお話で御座います。

但馬守は、暫くの間我が子十兵衛の様子を見て居りましたが、何か心に合點いて、窺と庭へ降り立ちまして、脚元にあつた小石を拾ひ取るが早い十兵衛目掛けてヒューツと抛げました。」

流石は將軍家へ御指南を致すところの但馬守の抛げた手練の礫、十兵衛ハツとして身を轉はして避けようとしたが及びません、ビシツと左の眼瞼を打たれました。すると、箒を投げ棄て、右の眼を掌にて蔽ひながら、飛鳥の如くにバラ／＼と

跳び込み來つて但馬守の手元へ付け入り、右手を小刀の柄に懸けて、「父上、何を遊ばすツ。」と身構へた其の働の素速さ、誠に寸分の隙もありません。

但馬守は之れを見て、我が子十兵衛が思つたよりも武藝の嗜が深いので嬉しくて堪りませんから、我識らず大きな聲で、「天晴れ出來した、許せ々々。」と頻りに笑壺に入つて居りましたが、稍やあつて、十兵衛に對ひ故意と威を作つて「汝は何故に打たれた眼を押へずして打たれぬ眼を押へたのであるか。」と尋ねますと、十兵衛は平氣な顔をして「一旦打れた眼は早や物の奴には立ちませんから、切めて右の眼を護つて、左の眼の敵を取つて遣らうと思つたので御座います。」と判然答へましたが、是れが劍道の秘訣であるさうで御座います。十兵衛が幼年にして既に此の秘訣を心得て居りましたので、但馬守は、口には言はぬが、心の中で「行末は天下に敵なき名人となるであらう。」と思つて、一層可愛がられました。

右の一段が本文の骨子であります。従つて、此所へは最も力を入れ

て話さなければならぬ道理で御座います。が、何分にも未熟な筆で
ありますから、實際に口頭で話す時の如くに、音聲や身振で助け合
ふのとは違つて、誠に思ふやうにならず、拙劣な點は誠に慚愧に堪
へぬ次第で御座います。

十兵衛が成人致しますと、果して但馬守の考へた通り、天下に敵なしといふ程の立
派な技挿となりました、此の十兵衛の教を受けて、柳生流劍道の業を卒へた弟子が
一萬三千六百餘人御座います、伊賀越の仇討で武勇の名を轟かした荒木又右衛門吉
村も亦弟子の一人で御座います。

もつと上手な括り方もありませうが、先づ之れで一場の話を總括す
る事に致しました。(拍手喝采)

注意の律動

注意の律動と申しますのは、人間の注意といふものは始終一様に續
くものでは無くて、絶えず波の動く如くに差し退きがあるといふ事
です。夫れ故に、話を聞いて居る間も、少し氣を付けて聽いて居る
かと思ふと、直きに疲れて氣が緩むもので御座います。恰も血管が
脈を搏つのに似て居ります。話の始から話の終りまで、同じやうに
ピンと氣を張り續ける譯には行かぬのであります。聽衆の氣の入れ
方は、強くなつたり弱くなつたりして寸時も落付いて居るものでは
御座いません、此の事を注意の律動と申します、話をする者は、能
く此の邊の理由を噛み分けて、聽衆を相手にせねばならぬのであり

ます。

他人の話（はなし）を聴（き）いて見（み）ましても、又（また）自分（じぶん）で話（はなし）をして見（み）ましても、先（ま）づ聴衆（ちやうしゆう）が餘（あま）り倦（あ）きずに聴（き）いて呉（く）れるのは一時（じ）間（かん）止（と）りであると思（おも）ひます。随分（ずいぶん）上手（じやうず）な人（ひと）の話（はなし）でも一（い）つ話（はなし）が一（じ）時間（かん）以上（いじやうつ）續（つ）きますと、話（はなし）の括（く）りを付（つ）けようとする肝心（かんじん）要（やう）の所（ところ）へ來（き）て聴衆（ちやうしゆう）が倦（あ）きて了（しま）ひます。

夫（そ）れなら、一（い）時間（かん）位（くらい）までは聴衆（ちやうしゆう）が凝（び）つとして聴（き）いて呉（く）れるかと申（ま）すと左様（さやう）は參（ま）りませぬ、一（い）時間（かん）の中（うち）にも、始（し）終（じゆう）聴衆（ちやうしゆう）の氣（き）の付（つ）け方（かた）は浮（う）いたり沈（しん）んだりして動（うご）いて居（ゐ）る、丁度（ちやうど）肝（かん）を搏（つか）つ如（ごと）くに氣（き）を張（は）つたり氣（き）を休（やす）めたりして居（ゐ）るものであります。

律動（りつどう）のこゝを心理學（しんりがく）の方（ほう）でリズムと申（ま）して居（ゐ）ることは皆（みな）様（さま）の御承知（ごしやうち）の事（こと）で御座（ござ）います。是（こ）れを又（また）話術（わじゆつ）の方（ほう）へ應（おう）用（よう）するこゝが頗（すこぶ）る肝心（かんじん）

ですから、話（はなし）をする者（もの）は是非（ぜいひ）注（ちゆう）意（い）の律動（りつどう）といふことを辨（わ）かへて置（お）かねばならぬもの。私（わたし）は考（かんが）へるのであります。殊（こと）に近頃（ちかごろ）では

「疲勞（ひらう）の研究（けんきゆう）」

と申（ま）す事（こと）が大分（だいぶ）進（すす）んで參（ま）りまして、此（こ）の邊（へん）の事情（じじやう）が餘程（よほど）解（わか）り易（やす）くなつて話術（わじゆつ）に應（おう）用（よう）するにも都合（ごうあ）が好（よ）くなつたので御座（ござ）います。

前（まへ）にも申（ま）し述べました通り、多（た）數（すう）の聴衆（ちやうしゆう）の面（めん）前（ぜん）に起（た）つて話（はなし）をしようと思（おも）はすと、先（ま）づ第一（だいいち）の仕（し）事（こと）として、相（あ）手（て）の心（こゝろ）を自（じ）分（ぶん）の方（ほう）へ向（む）けさせる事（こと）が最（も）も肝心（かんじん）なことでありますから、話術（わじゆつ）の研究（けんきゆう）者（しゃ）は、先（ま）づ以（もつ）て聴衆（ちやうしゆう）の氣（き）を自（じ）分（ぶん）の方（ほう）へ引（ひ）き付（つ）ける手（て）段（だん）を研（けん）究（きゆう）しなければならぬので御座（ござ）います。

聴衆（ちやうしゆう）の氣（き）の張（は）り緊（つ）め方（かた）と緩（ゆる）め方（かた）はどんな風（ふう）になつて居（ゐ）るものかと申（ま）す。

再び元氣を増して(ニ)の所まで氣を張り緊めたが、扱又今度も疲れが出て来て氣が緩んで(ホ)の所へ降つて来るので御座います。

始の刺激

話の始に、聴衆の氣を自分の方へ向けさせる事は、取も直さず此の「始の刺激」で御座います。話者の方から云へば、愈々話を始めますぞといふ合圖をして聴衆の心をヒヨいとつつ突いたのが始の刺激を與へた事になるのであります。始めの刺激の與へ方にも色々な仕方が御座います。

拍手は始の刺激の一ツであります。話をする者が演壇に登つて軽く

二度目に氣を張り緊めた時

最よく氣を張り緊めた時



しますと大體上の圖の如きものであります。(イ)の所から段々に氣を張つて行きました。(口)の所で最も張り緊める、すると、今度は疲れが来て折角張り緊めた氣が緩んで(ハ)の所まで沈んでしまいます。所で、是れではならんといふ終の刺激で、ハツとして息氣を吹き返したやうに、更に氣を入れ替へて張り緊めますが、如何せん前々からの疲れがある爲に、(口)の高さまでは張り切ることが出来ませんけれども、夫れでも

會釋を致しますと、大抵聴衆の方がバチ／＼と拍手するもので御座います。此の拍手が自然に始の刺激となつて、聴衆の方では我知らず話を聞かうといふ氣構になるので御座いますから、若し聴衆の方で拍手しなかつた場合とか、幼年の者で拍手することを知らぬ場合でもあつたならば、話者の方から聴衆へ向つて拍手を請求するのにも宜しからうと思ひます。實際お伽話などをするには斯くして兒童の氣を引き付けることが必要であります。現に私の知つて居る方は是れを唯一の慣用手段とし成功して居ります。目先の替るといふ事も始の刺激の一つであります。舞臺が替つたり演壇の飾り付けが替つたりする事は勿論始の刺激であります。其れよりも話者の交替して現はれたといふ事は一層力の強い始の刺激

となるので御座います。夫れから又、縦へ同じ話者が話をするにしても、話題を替へますと是れが又始の刺激となります。前の話で大分聴衆は倦きて厭になつた頃でも、右の如くして目先を替へますと、又新に氣を張り込んで、もう一ツ聴かうといふ身構になるとの御座います。斯やうな理由を承知して寄席などへ行つて見ますと、流石は商賣人で、番組が中の巧者に出て居るナと思ふ事があります。割合に未熟な者が前座を勤めて、終の眞打は腕利が勤めると云ふのも大體に於いて當を得て居ります。

終 の 刺 激

聴衆が、始の刺激を受けて段々話に釣り込まれて、遂に（口）の所まで引き上げられた時は最も身に這入つた時で、興味津々とも申すべき時で御座います。併し、それも束の間で、疲れが来る、倦きて来る、厭になる、ウンザリする、従つて聴衆の氣力はズン／＼降り坂になつて来る、其所で又、ピンと聴衆の氣力をつツ突いて元氣を出させるのが此の

「終の刺激。」

であります。

終の刺激の與へ方にも色々な仕方が御座います。

話の終結を豫告するといふ事も終の刺激であります。例へば、

「最後に、何々の一事を述べて此の演壇を降らうと思ひます。」

とか、又は

「もう一事お話してお終ひに致します。」

と申しますと、聴衆の方でも一時ヒョイと居すまるを直して、

「夫れなら我慢してもう一息聴かう。」

と云ふ氣持になるもので御座います。丁度、疲れ切つた旅人も愈々目的の土地が見えて來ますと、急に元氣が出て脚が軽くなつたやうな氣持がするのと同じ事でありませう。最早倦々した場合でも、後少して終ひになるといふ的が付くと、又一時元氣を取り返すので御座います。

程よい所でチャリを入れることも一つの刺激でありますし、又面白い例話を引合に出す事も一つの方便であります。散々管々しい話をして来た所で、鳥渡

「皆さん、其れに就いて斯う云ふ面白い話が御座います。」

と前置して、其の場其の時に最相應して誰が聴いても極く面白い話を間へ挟んで入れますと、又聴衆も目先が替つて氣を新しくして呉れるもので御座います。

右に述べました事は、主に一人の話として申したので御座いますが、話者數人が交々話をする時、全體としても同様な理由であるのです。劇場や寄席では

「中入り。」

と申しまして、愈々、是れから大立物の眞打が出る前とか、又後大切でハネるといふ前に一休み致しますのは、結局終の刺激に當るものです。此の點に於いては、相撲の番組が餘程巧妙に出來て居ると思ひます。始は幕下から段々取り組んで來て、見物人の氣が乗つた時分に、必ず其の日の目差すべき好取組があつてヤンヤと囃させる。其所で一先づ中入り、更に氣を新にして又好取組が二三番續いて花々しく打出しとなるので御座います。

斯かる理由が有りますから、話者は豫め例に引いて面白いやうな話の種を貯へて置く事が肝要であります。

一續きの話の中へ鳥渡挟んで刺激になりさうなものを三ツ四ツ御參考に供しませう。

○辱しめられたのが却て發憤の基となつて終に成功した話。

松島圓福寺の開山始祖は禪僧の中で名高い法心和尙で御座います。法心が此の圓福寺を開くに至つた因縁に就いて面白い話があります。法心は元眞壁平四郎と云つて伊達政宗公の足輕を勤めて居りました。政宗公が他所へ行かれる折には、毎時もお供をして履物のお世話をするのが平四郎の役目でありました。此の平四郎は他人の見る目もいぢらしい程に主人思ひの男で御座いました。或年の冬の事、政宗公が他所へ行かれたので、平四郎は例の如く玄關先へ履物をキチンと揃へて、主人の歸りを慎まし氣に待ち受けて居りました。丁度其の日は、朝から空が雪模様で身を劈るやうな寒さで御座いましたが、早や白い物がチラ／＼と降つてまゐりました。其所で、主人思ひの平四郎が竊と下駄の臺へ手を觸れて見ますとヒヤリとする程冷えて居ります。この儘政宗公が穿かれたなら嘸冷たい事であらうと思案して、件の下駄を自分の懐に入れて温めて居りました。聽て、御歸館の聲に愕いて慌て、懐から下駄を出さうとする一刹那

早くも政宗公は玄關の式臺へ現はれて、此の體をチラと視たものですから、「ハテ怪しからん、下駄とは云ひ條、主人の體に觸れる物、其れを穢らしい自分の膚に觸れさせて居るとは、身分を辨へぬ不屈な行爲である。」と短氣の政宗公烈火の如くに怒られて右手に下駄を取り上げるが早い平四郎の眉間の邊をビシ／＼と撲ぐつたから堪らない額は破れて血はダラ／＼と流れる、すると、政宗公は鮮血に染つた下駄を忌々し氣に其所へ抛げ棄て、散々の御不興で館へ歸られました。跡へ残された平四郎は、額の傷を左手で押へながら暫の間は遣る瀬なき顔付で、凝つと己が血汐で染つた下駄を見詰て居りましたが、「嗟、身分の違ふといふものは實に情無いものだ。怒ひ侍になりたがればこそ斯んな惨しい目に遭ふのであるから、寧ろ思ひ斷つて佛門に這入らうと覺悟を致し是れから十分に修業を積まうと思ひますから、早速海を踰えて宋へ行き、宋とは唯今の中華民國の事で御座います。其所で徑山に居ります所の佛鑑禪師の手許に於いて、九年間禪坐を組んで工夫を凝しました。平四郎とても同じ人

間の身でありますから、永い間には随分苦しくなつて流石の氣力も挫けようとする事が度々御座いましたが、斯やうな時には毎時携へ來つた例の血染の下駄を自分の面へ突き付けて「エ、是れ位の事に恐れてどうなるものか。」と我と我が心を勵まして、遂々悟を開くことが出來ました。夫れから、日本へ歸つて來て見ますと法心和尙の評判は大したもので、何所へ行つても生佛として仰がれましたが、自分が幾多の難行苦行を堪へ透して是れだけの修業の出來たのも、原はと云へば此の下駄で額を割れた爲めである。其の當時こそ、撲つた主人を恨みもしたが今となつて見れば有り難い恩人であるから、どうかして一度舊の主人に會つて禮を述べようと考へまして、久しぶりで政宗公を尋ねました所が、何がさて、天下に名の轟いた高僧が態々來られたと云ふのですから政宗公の喜びは大したもの自身玄關に出迎へて奥御殿へ案内を致し、下へも置かぬ鄭重な取扱で御座います。法心和尙は導かれる儘にズーツと上座へ着きまして、一應の挨拶が済みますと、靜に一包の品を政宗公の前へ差し出して「此れ

は、愚僧が先年拜借致したる品物、唯今御返却申すに依り改めてお受取下されたい。」と申したから、政宗公は「ハテ、不思議な事を申さるゝものかな。」と怪訝な顔して、件の包を受取りながらソツと包を解いて見ると驚いた、曾て自分が一時の怒りに任せて足輕平四郎の眉間を撲つた血塗れの下駄が中から出たのです。流石豪氣の政宗公も此時ばかりはハツと思ふと顔色を蒼白にして席を退り、言葉を改めて、前年の過を詫びられました。すると、法心和尙は是亦席を下つて兩手を支へ、斯やうに詫びられては愚僧却つて恐入ります。愚僧の今日あるは全く此の下駄の賜で御座る。されば愚僧に於いては有り難くこそ思へ決して恨とは存じませぬ。」と言つて、暫くは互に譲り合つて居りましたが、政宗公も餘程法心和尙の高徳に服したものと見え、早速松島へ圓福寺を建立致して法心和尙に達て願つて開山して貰つたので御座います。今も血染の下駄は保存されてあるさうですが、遠上三徑山二分三風月。歸開圓福大道場。透二得法身一無二一物。元是真壁平四郎。と云ふ和尙の心偈は有名なもので御座います。

頼春水が發憤した原因も亦是れとよく似て居ります。春水幼少の時些細な事で土地の名主に頭を撲られまして残念で堪らない、此の辱しめを報ずるにはどうしたら宜からうかと父に尋ねました所が、父の申すには、將來立派な醫者になるか、然もなくば優れた學者になつて見せるより外に途が無いとの事に、然らばといふので、春水は刻苦精勵の功を積んで、遂々天下に名を擧げました。春水が立派に仕上げてから後、禮を述べ度いと思つて、以前の名主を訪ねた所が、名主は縮み上つて恐れまして、他所へ逃げて了ひましたから、春水も致し方なく名主の息子に遭つて懇々と禮を申して来たといふ事であります。

○物外和尚 近藤勇を懲す。

備後國の物外和尚は世間の人から腕力和尚とも拳骨和尚とも云はれた程だけあつて恐ろしく勇氣に富んだ坊主さんでありました。其の時分京都の、近藤勇といへば勇名關西に隠れなく、殊に、武藝にかけては中々の腕前で有りましたから、多數の門下生を

集めて武藝の指南を致して居りましたが、弟子共は動もすると先生の名高いのを傘に着て亂暴したもので、世間の人は其れが爲に随分迷惑をして居りました。

或日の事、此の近藤勇が門弟を數十人引き連れて遊山に出ました。今日こそ仕放題の愉快を盡さつと云ふので、其所の茶屋でも酒を飲み、此所の料理屋でも飲んで見る、何所の店でも跡の崇りが怖いから頻りにチャホヤするのを好い事にして、京都の町中を騒がせて居りましたが、何がさて、平素から武藝自慢の面々で御座いますから、酒の酔ひが回つて來るにつれて無暗に往來の人を捉へては困らせ詫びさせる、弱い侍は遠くの方から逃げて了ふやうな始末で御座いました。すると、其所へヒョッコリ出遭つたのが物外和尚、何も知らんから平氣で道の真中を歩いて來ると、近藤の門弟數十人がバラバラと走り來つて、物外を中に取り巻いて口々に悪口雑言を始めました。「今日は近藤先生始め門下の者が遊山を致すのである。汝坊主の分際として往來の妨を致すとは不都合な奴だ。」何方が不都合な奴だか判りませんが、散々に物外へ食つて

掛る、門弟の中には氣速な者があつて、イキナリ拳を握つて物外の頭を擲らうとした所が、ドッコイ其んな者に打たれる物外では無い、チヨイと體を捻つて、門弟の拳に空を打たせて置いて利腕をグイッと引つ捉へ二三間向へブウンと唸るやうに放げ付きました。サア多勢を恃む門弟共は承知しない、ソレツと云ふと大刀を抜き連ねて物外に切つて掛かる、物外は少しも周章せず、一番前へ進んで来た一人の腰を引つ握んで風車の如くに振り廻し、群がる門弟の中へ跳び込んで、當るを僥倖撲り付けましたから、群がる門弟共何れも瘤だらけになつて、ハッハッと息をはづませて居るばかり、最早恐れて物外へ向ふ者が無い。すると、先刻から此の様子を見て居た大先生の近藤勇が、ヅカ／＼と物外の面前へ立ち現はれて、「サテも心憎き汝の振舞、イデ今度は我自身で對手を致さん。」と云ひながら刀の柄に手を懸けました。之れを見ると、物外何と思つたかビタリと平蜘蛛の如くに地に伏して、ひたあやまりに無禮を詫びるのであります。御身は當時雷名を轟して居る武藝の鬼神で御座れば、我等如き雲水僧などの

到底及ばう筈は無いに依つて、何卒其義許りは許し給へと、「繰り返し／＼あやまつたけれども、怒り心頭に徹した近藤、いつかな聽き容れやうとする氣色が無いから、物外和尚も致し方なく、「然らば己むを得ぬに依つてお相手を仕らう。」とヌツクと起ち上り、携へて居た御器椀を兩手に持ちました。流石の近藤勇も呆氣に取られて、「コレ／＼坊主、凡そ果合をしよう」と云ふには大抵武器の定まつたものだ、汝の如く穢い乞食の椀で鬭ふと云ふ法は無い。」と威猛高になつて申しますと、物外は「否、武器は侍の持つべきもので、我等如き僧侶の手にすべきもので無いから、此の頭陀椀で澤山で御座る。いざ、何方からでも掛り給へ。」と云ひましたので、近藤勇は益々怒り狂ひ、今度は大身の槍の鞘を拂ひまして、物外へ對けビタリと付けましたが、意外にも和尚の身には寸毫の隙も無い。瞬もせず、半時許といふものは互に睨み合つて居りました。すると、何所かに隙でも出来たのか、近藤勇がエイツと一聲巖をも通れと突き出したのを、物外飛鳥の如くに身を開いたかと思ふ

と二箇の椀で槍の蛙卷の所をグツと挟んで了ひました。夫れから、近藤勇は外づさうと思つて満身の力を凝めて、引いて見るが、押して見るが、まるで磐石の如くビクともし無い、見る／＼内に近藤勇の額からは汗が瀧の如くに流れて来る、懸て、物外和尚がクワアツと一喝、禪門の極意を表して、例の頭陀椀をバツと放すと、近藤はヒョロ／＼ツと踏けて後の方へ挫と倒れ、持った槍は斜になつて、傍の店の軒先へ突張つて了ひました。

禪僧の傳記を調べて見ますと、右の話のやうに、聴く者の胸が清々する材料が澤山あります。一休禪師にも澤庵和尚にも同様な話が御座います。

○夫を成功させた妻の話

仙臺藩に井伊直人と云ふ武士が居ました。真人の父は剣道の指南役を勤めて評判の高い人であつたが、父の死後、どうしたものか直人は身持放埒にして手の着けやうが無い。親類の者は大層心配したが、能々天魔が魁入つたものと見え中々改めさうにも無

いので、種々思案の末に、同藩瀧澤準人の娘お定といふのを嫁に貰つて遣ふことに致しました。此のお定と申す娘は、當時仙臺小町とも云はれて、界限切つての美人で御座いました。然れば、いかな直人も身持を憐めるだらうと思ひの外、中々直ら無い。遂々お定の嫁入道具を無くして了つた揚句の果に賭博の負債二百金を生家から都合して来いとお定に咄咐けました。貞女のお定はハイ／＼と云つて、其の二百金を父の準人から貰つて来まして、偕、夫に對つて云ふには「此のお金は唯は差し上げられません、失禮ですが、私と一本お立合を願ひ度い、若し郎君が負ければ差し上げることは出来ません。」といふので、然らばと双方禪十字に綾取つて、袋竹刀で立合ひましたが、お定は穴澤流の免許皆傳の腕前、チリツ／＼と二足三足進んで、エイヤツと聲諸共に打ち下した手練の早業、忽ち夫を打伏せまして懇々と意見をしました所が、流石の直人も始めて目が醒めて、愈々江戸へ上つて修業をする事になりました。其の二百金を旅費として出立致し、柳生家の門に入つて、五年の間修業を續けましたから「是れな

ら大丈夫であらう妻に負けるやうな事は無からう。」と考へて久し振りに歸宅つて見ると、屋敷は以前にも増して立派に手入れが届いて居ります。其所で、我家の入口に立つて訪ひますと、何は扱置き、一本お立合を願つて、お手並を拜見した上で座敷へお通し申す。」といふので、直人は腹の中では何を小癢なと思つたが、庭先へ廻つて又も立合つて見ますと驚いた、未だく、お定の方が遙に伎倆が上で、直人は脆くも打ち据ゑられました。サア、事です。今度は直人が散々に脂を絞られてグウの音も出せません。又も悄然と我家を辭して、再び柳生家へ戻りまして一心不亂寝る目も休まず修業しました所が、腕はメキ／＼上達して、三年の後には柳生流の奥儀を極め、皆傳を許されて我家へ歸つて見ますと、之れは又意外、お定は奥から駈け出して、叮嚀に夫を出迎へ、早や嬉し涙をポロ／＼と落して居ます。其所で直人は「ソんなに喜んで呉れども、又負けると座敷へ上れないから、先づ一本立合を致さう。」と申しますと、妻のお定は「何の勿體ない事。女の妾が何で郎君のお對手が出来ませう。」と云つて、足洗

の水を運ぶやら、草鞋の紐を解くやらして、忙々しく夫を勞りました。これは俗に仙臺の鬼夫婦と呼ばれて名高い話で御座います。

話 術 と 言 葉

言葉は申すまでも無く話術の上で唯一の武器であります。若し言葉が無かつたなら殆んど話術は成り立たないので御座います。言葉があればこそ話術が成り立つので、彼の身振りとか手眞似とかいふものは全く言葉の補ひでありますから、一切言葉を抜きにして、身振り手眞似で他人に思想を傳へようとすれば、丁度世間の人は皆啞になつた譯で随分奇妙な可笑しな事になります。話をする者は、常始終注意して、種々の言葉を豊富に貯へて置いて、

入用に臨んでは、糸を手繰るやうにする／＼と引き出す事の出来る仕度をして置くことが頗る肝要であります。自分の頭の中に貯へて有る言葉が貧弱では到底思ふやうな面白い話は出来ぬもので御座います。何故かと申しますと、自分の思想と其れを現す言葉とがカツキリ一致しないからであります。

話をする者で聴衆へ情を移さうと致しますと、是非とも思想と言葉を一致させなければなりません。例へて申せば、悠長な趣を表さうとすれば、春の夕と云つたやうにいかにも悠長らしく聞える言葉がありませんし、又反對に、急ぎ込んだ間一髪といったやうな味を現はさうとすれば、電光石火とか、紫電一閃とか云つたやうな、其れに相當した言葉が御座いませう。

總じて、話は

「らしく」

話すのが可いので、殿様の言葉は殿様らしく、書生の話は書生らしく、職人や勇肌の事は成るべく職人らしく、哥兄らしく言葉を使つて始めて其の話が活きて來るのであります。一續の話の中でも、種々と云ひ換へ云ひ直して居ると、夫々に趣が變つて來て、如何にも其の場其の時に居合はして居るやうな心地が致すもので御座います。其所で、私共は平生、あらゆる身分階級職業に應じた慣用語を氣を付けて覚えて置いて、成るべく夫々に使ひ分けることが又頗る大切な事で御座います。尤、私共の如く、幾分教育の意味合を以て話をする者と、講談師の如く一つの藝術家として世に立つ者とは、其の

間に於いて大分相違があります。

(甲) 講話講演を主とする側では

何所までも教育者の位地に立つて話をするのであるから、飽くまで説明者の態度を保つて居らねばならない、いくら話を活さうと思つた所が、又いくら情を移さうとした所で、自分の人格を失つて了つてはならない。話は話、自分は自分と、其の間に判然區別りが存して居るので御座います。

(乙) 藝術家の側では

自分が全く話の中の人物となつて了ひます。自分の人格は暫く捨て、了つて居る、其所に藝術家としての伎倆があり、妙味が生じて来るのであります。聴衆が話に魅せられると云ふのは、主とし

て此所から湧き出して来るところの現象であります。

其れ故に、藝術家の側では、木村重成の話をするには自分が先づ木村重成になつて了つて話をするので、何所までも木村重成の気分は現はさなければなりません。然もなく、重成の口吻で居りながらヒヨイ／＼と講談師の人柄が顔を出しますと随分可笑しな重成が出来て了ひます。假りに考へて御覧なさい、木村重成が巻舌のペランメイ口調で淀君を諫めたり、手背で鼻汁を擦つたりしたら、如何でせうか。

然らば、講話講演を主とする者と講談師との間には、右に述べました如くキチンと境界が立て、あるかと申しますと、いつも眞理は中央に在りて、極端では眞理が捉へられないものと相場が定まつて居

るさうですが、此の場合にも、餘り片寄り過ぎるのは悪いと思ひます、甲の方でも餘程乙の方を加味して可いだらうと思ひますが、唯一點、自分の人格を毀け無い限りに於いてごいふ一條件は守らねばならぬので御座います。乙の方でも亦同じ事で、話中の人物を成るべく活さうとするのですから、其の活さうと考へる自分の心は確り立て、置かねばならぬのであります。

右に述べた次第に由つて、講談師の如きは言葉の使ひ分けから身振りの末に至るまで、浮身を窠して稽古する、此の點に於いては、他人に知れない苦勞をして居るさうですか、講話を主とする方では、左程の骨折はせんでも可いと思ひます、其の代り又言葉の事は十分に調べて、聴衆に徹底するやうに努めなければなりません。

聴衆の大部分が子供であるならば、子供に解る限りの言葉を使つて自分の思ふ事を述べ切ることが肝心で御座います。縦へ智識もあり學問もある大人の寄り合ひであつたにしても、言葉が易過ぎて困るといふ事は御座いませぬ。堅くて硬い食物は、能く噛み緊めれば味があります、胃の消化力の弱い者には却て害になります。けれども、柔い粥ならば弱い者にも宣しいと同時に強い者にも害にはならぬのと同様な理由で御座います。

話術に使ふ言葉は第一に誰にも解るものでなければならぬ。聴衆の一部分には解つても他の一部分には解らんといふやうな言葉は使はぬ方が宜しいのであります。餘り堅苦しい四角張つた言葉を使ふよりも、寧ろ能く噛み砕いた解りの好い言葉を使ふ方が成功し易いの

で御座います。

次には、或るべく現在行はれて居る言葉を使ふべきであります。何か特別の註文があつて、故意と用ひるのでない限りは、古の言葉を其儘使はずに、現在の言葉に翻譯してから使ふやうに致し度いと思ひます。其の次には外國語ですが、兎角演説や講義には一種の飾りの如くに、外國語が使はれて、幾ツかの外國語を混ぜぬ時には、如何にも學問の土臺が淺薄であると感ずるかのやうに、頻りと之れを振り翳したがる辯士もありますが、話術としては餘程考へ物で御座います。尤、ランプとか、インキとか、ステツキの如く、日本語に化けて了つたのは其の儘使つて差支ないのみならず、他の言葉に直しては却て解り難いものになつて了ひます。

前にもお話申した通り、群衆といふものは頗る感情的で想像力の強い者でありますから、僅かの事で直ぐ興奮し激昂し易い者であります。由て、話をするにも此の呼吸をよく飲み込んで、群衆の性質を利用する所の、謂はゞ寸鐵人を殺すといふやうな言葉で、聴衆の胸へギクリと堪へる言葉を前以て用意して置いて、其れを入用に應じて使ひますならば十分利目が現はれます。是もあまり六ヶ敷言葉では効驗が薄い。或べく具体的で而して色彩の鮮明なものが却つて力の強いもので御座います。話題に由て聴衆を引き付けようとする時にも、此の邊の注意が頗る肝心であります。其れと此れとは違ひますが、人の氣を惹き付けるといふ根本の考は全く同じ事で、話題を撰ぶにも、言葉の使ひ方にも、餘程参考にな

る事柄が日々の新聞紙の広告欄に見えて居ります。米國では

「廣告の心理」

と名付けて、是れを専門に研究して居る者があるさうですが、夫れ程までには行かぬとした所で、中々巧妙な方法で廣告して居るものがあります。例へば

誰でも 婿に貰はれる。
嫁に貰はれる。

と大字で現した廣告がある。此の言葉は慥に當世のハイカラや底髪ひましかりの弱點急所を突き貫いて居ります。彼等は此の言葉をチラと聞いたが最後の助、丁度魔術に掛かつた如く魅せられて了ふに相違無いハテ何事かと氣を付けて見れば、更に小さき文字で

「何々の齒磨を使ふ男女は。」

と云ふ言葉が添へてあります。それから又、聖徳太子とか、中將姫とか、小野小町とか、人の能く知つて居る標題を掲げ、更に今日評判の高い俳優若くは女優の名を以て尤らしく話をして居るかと思ふと、ドンツマリは自家化粧品じかけしやうひんの効能を述べ立て、居るのであります。私は之れを此の儘話術まじやうに用ひようとするのではないが、此の氣合を言葉の上に應用したならば頗る妙であらうと考へるのであります。併し、下手をすると却て鵝の眞似まねする鳥になりますから十分注意せねばならぬことは勿論で御座います。

次に申し述べたいのは流行語の事でありませう。御承知の通り、時折に流行する言葉があるので、大分久しい前に

「何んて間が好いでせう。」

「ごいふ言葉が非常に流行しまして、俗謡にまでも作られ、東京では毎夜辻々に此の謡を聞いたもので御座います。當時の事、私が或小学校の學藝會の席上で話をしました時に、鳥渡思ひ付いて、

「何んて間が悪いんでせう。」

とチャリを入れて見た所が、餘程可笑しく聴えたものと見えて大喝采を博しましたから、其後數回此の言葉を使つたことがありました。是等は申し上ぐる程でも無い事ですが、兎も角も、其時々流行語といふものは中々勢力の強いもので御座いますから、程よく應用するのには必要であらうと考へます。

其所で、色々な言葉を覺える方法ですが、私が實際行つて居ります

のは、鳥渡した帳面を一部ポケットの中へ入れて置きまして、書物を読んだ時や、人から話を聞いた時に、始終氣を付けて書き留めて置く事です。常々注意して居りますと中々澤山集りますから、時々出して復習をするので御座います。東京は便利な所で、諸國の人々が寄り合つて居ますから、方言や訛なども割合に容易く集められるので御座います。

私は曾て可笑味のある田舎者の言葉を知らうと思つて、或落語家の話を聴きに行つた事がありました。時間は僅に三十分許りでしたが、其の時チヨイ／＼と書取つたのが左の通りです。

投つて置いてくらつせえ。——構はんで呉れ。

もう一日遊んでいつて呉んろ。

なんで頭べえ下げてるだ、此方へ這入つたらよかんべえ。
俺をこづくだ。

……と欺う云ふだから手におへねえだ。
こりや手前に呉れてやるだ。

仔細はあるめえ。

錢が此所にあるだから。

お前知つて居べえ。

馬鹿べえ云つて居る。

お梅の尼つちよ。

何うもハア唯事ではあんめえと思はねえではなかつたがまさかにかアそんな事とは
夢にも知らなんだ。

是等の言葉は、此の儘そつくり私共の話に使ふ譯には行きませんが、

覚えて置けば又何かの役に立たうと思つて書き留めたので御座いま
す。此の調子で言葉を集めますと、京大阪の上方辯でも、東北辯で
も九州訛りでも、直きに澤山溜めることが出来ます。
元來言葉といふものと音聲とは、切つても断れぬ間柄で御座います
から、話術の方では、言葉と音聲と相須つて完全に役を勤める事が
出来るのであります。故に、更に模聲や音聲のお話を致します時に、
此所の不足を補ふことに致しませう。

模聲及び模形

唯

「笑ふ。」

と申しても解ることは解りますが、其れにニコ／＼とかクス／＼とかアハ、とかいふ言葉を添へて

「ニコ／＼笑ふ。」

「クス／＼笑ふ。」

「アハ、と笑ふ。」

「オホホホ。」

「エヘヘ。」

「ゲラゲラ。」

「ニヤニヤ。」

としますと、同じ笑つたにしても其の笑ひ方が想ひ遣られて、能く情が移るもので御座います。ニコ／＼といへば如何にも會心の笑みで無邪氣な笑顔が見えるやうであります。クス／＼といへば抑へ切

れずに内密で笑ふ様子、婦人ならば袖を口に當て、笑つたやうな状態が忍ばれますし、又アハ、といへば如何にも大口を開いて大袈裟な笑ひ方で、笑ひ轉ぶと云つたやうな有様が想ひ遣れるので御座います、私は此のニコ／＼クス／＼アハ、の如きものを指して模聲と申して居ります、文法の方で形容詞とか副詞とか申す部類の言葉が主として此の模聲に使はれるのであります、

是れまでも度々申し述べました如く、群衆の頭は著しく想像力に富んで居るもので御座いますから、此の模聲やら夫れから次にお話摸さうと思ふ摸形即ち身振りやら假聲などを少し巧妙に用ひますならば、群衆は忽ち其れに酔はされて了つて、持前の想像力を際限なく擴げて行きますから、丁度眼の前で話中の人物や所作を觀て居るの

と同じやうな感じを起すので御座います。でありますから、話をする者が此所の氣合をよく辨へて、程よく模聲や摸形を取り交せて用ひますならば、聴衆をチャームして泣かせることも笑はせることも或は憤らせることも左程に困難な事柄では無いのであらうと思ひます。

學校へ通ひ始めの幼稚な兒女が可愛い口で、今日習つた

ピー／＼ドン／＼。ピードン／＼。

といふ唱歌をうたひながら夕暮の田畝道を歩いて來るのと出會ふことがあります。此のピー／＼ドン／＼の如きは全く模聲ばかりで御座いますが、實に巧妙に出來たものだと思ひます。ピー／＼で笛の音、ドン／＼で太鼓の音を現したことは申すまでも無いが、私共が

之れを聞くと、如何にも質朴な地方の鎮守祭禮の賑ひを森一ツ隔て、聽いて居るやうな氣分が致します。

私は摸聲を覺える方法としても言葉を覺えるときと同様に、聞く度に讀む毎に記して置くことに致して居ります。是れも少し注意して集めますと直に澤山溜るもので御座います。雀がチュー／＼、鳥がカア／＼の如く、禽獸の鳴聲ばかりを集めましたも中々數多いものであります。斯んな事にも非常に熱心な方がありますもので、某君の如きは一心に犬の吠える聲を研究されまして、今日では自由自在に色々吠え別けることが出来るやうにあられました。此の人が物蔭に姿を匿して吠え聲を眞似ますと、表を通る本物の犬が必ず呼應して吠え出しますし

「彼の犬を一ツ怖れさせて遣らう。」

と思へば、其の犬よりも一層大なる犬に相當する吠え聲を眞似するので、小さな犬は是れはとても敵はんと思ふか非常に驚いて精々と吠え立てるので御座います、此の人は英語の素養があるので、英語の發音を基として研究されたのださうです、摸聲の稽古も此所まで上達すると殆んど公治長のやうな者で御座います、此の人のお伽話は犬の吠へ聲に由て何日もを采を博するので、此點に於て先づ天下一品で御座いませう。

一般の講話としては、某君の如くに深入せんでも宜しからうと考へますが、彼の落語家などには、往々種此の技に長じた者があつて猫の鳴き聲などを巧に演ずることが御座いますが、其れは所謂藝術

家の方へ任せて置き度いと思ふのであります。

私は例に依つて此の摸聲を覺える爲に頻りに帳面に書き取つたものですが、其の帳面の第一頁を開いて見ますと左の如く順序も秩序もなく無雜作に記してあります。

バラ／＼逃げ出す

木の葉が風に吹かれてバラ／＼散る。

○バラ／＼は重くバラ／＼は軽く發表する。

牛はノツソリ／＼歩くが兎はビヨン／＼跳んで来る。

川の中へドブーンと飛び込んだ。

○プウーンの餘韻を響かせる。丸橋忠彌を氣取つて見たら如何。深長の意味がある。

ポチャンとすると川が浅くなる。淺薄である。

懐劍をスラリと抜いた。(女性的)

大刀をギリリと抜いた。(男性的)

グサツと突く、ブツリと刺す。

○前者は血が逆しる、後者は血が出ない針か千枚通しの音。

グツと押へつける。

○餘力を凝めた形。押へられた者は目を白黒して居る。

ビタリと當てる。

○ひやりと冷い感じがする。

ハツと愕く。

ホツと溜息を吐く。

ビシヤリと撲つ。

○蚯蚓腫が出来さうな音。痛い感じがある。

ボンと撲つ。

○可愛い人の脊中を打つた心地。痛くはない。

酒をナミ〜と酌ぐ。

酒をガブ〜飲む。

○ナミ〜は穩で好意が現れて居るがガブ〜は腹に一物蟻つた貌がある。

花がヒラヒラ散る。

○ヒラヒラを軽く緩つくり言へば、春の夕の優美な感じが起つて来て如何にも暢

びりした長閑な想がする。

花がヒラ〜散る。

○ヒラ〜を忙しく言へば、折角の花が悉く死んで了つて嫌な氣になる。

風がゴーツゴーツと吹く。

○落ち付いて重く言へば壯美の感を生ずる。

風がヒュー／＼吹く。

○身を劈るやうな隙間漏る風。貧乏人の寒さ。

ハツタと睨む。(界性的)

白眼でチラと睨む。(女性的)

キヨロ／＼見回す。

○掏摸の目付を想ひ出させる。卑怯な目付。

右の調子で段々書き足して行きますよ、頗る興味を感じて来るものであります。と申すのは、斯うして居ると間も無く自分だけに

「ハハア成程。」

「ウ、ム左様か。」

と黙頭かれる事があるからで御座います。

次に申し述べ度いことは假聲であります。前にも述べました如く、

講談師や落語家のやうな藝術家であるならば自分が全く話中の人物となつて了ふのでありますから、自分で無い話中の人物らしい假聲を使ふ必要が起つて来るので御座います。講談師自身の聲では自身の人格が現はれて了つて、話中の人物が活躍しない事になりますので、勢ひ假聲を使つて話中の人物を髣髴たらしめやうと努めるので御座います。所が、私共の如く講話を主とする者になります。自分分は飽くまで説明者の位地に立つて居るのでありますから、自分の人格は何所までも維持して行かねばならない。従つて、自己の音聲を没却する事が出来ないで御座います、併しながら、私共とても極端に自己を主張することになりますと、折角の話に興が湧かず、情味が一向移りませんから、自分の人格自分の威厳を損じ無い限り